

雲仙市文化財調査報告書 第12集
tsukuda
佃 遺跡 II

—神代地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—

2013

長崎県雲仙市教育委員会

巻頭図版



77区～81区 大型掘立柱建物と竪穴住居

例　　言

1 本報告は平成7年度～平成10年度に実施した神代地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町（現長崎県雲仙市国見町）に所在する佃遺跡の緊急発掘調査の報告である。

2 調査は国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が担当した。

発掘調査は下記の期間実施した。

1996年2月5日～1998年11月1日 佃遺跡1区～90区

3 調査体制は次のとおりである。

調査指導	別府大学	名　誉　教　授	賀川　光夫
	名古屋大学	名　誉　教　授	渡辺　誠
	長崎外国語大学	教　　授	木本　雅康
	長崎大学	准　教　授	長岡　信治
調査主体	国見町教育委員会	教　育　長	阿比留　亨
		教　育　次　長	松本　安央
調査担当	同	教　育　次　長	松本　安央
		社会教育係	辻田　直人
		文化財調査員	松崎　由紀子
調査協力		長崎県教育庁文化課（現学芸文化課）	
現体制	雲仙市教育委員会	教　育　長	山野　義一
		生涯学習課長	村山　岩穂
		文化財班班長	田中　卓郎
		参　事　補	辻田　直人
		主　　査	富永　康史
		文化財調査員	村子　晴奈・竹田　将仁・青木　翔太郎
		文化財整理員	早稲田一美・柳原亜矢子・本田　円香

4 現地での遺構・遺物の実測は酒井由紀子・東　文子・林　繁美・寺中典子・村子香織・鍬塚秀樹・松崎・辻田が行い、遺物の実測は村子・竹田・青木・本田が、トレースは早稲田が行った。また、図版の編集・作成は辻田・村子が行い、写真は現地調査を辻田・松崎が、遺物写真は柳原・辻田・村子が行った。

5 遺構実測の一部は株埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6 空中写真撮影業務は（有）文化財環境整備研究所（現（株）九州文化財研究所）に委託した。

7 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市歴史資料館国見展示館で保管している。

8 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は旧日本測地系による。

9 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。

賀川光夫（別府大学名誉教授）、渡辺誠（名古屋大学文学部名誉教授）、木本雅康（長崎外国語大学教授）、長岡信治（長崎大学教育学部准教授）、古門雅高（長崎県教育委員会）、渡邊康行、上野淳也（別府大学）、塙塚浩一（平戸市教育委員会）、荒木伸也（南島原市教育委員会）、東　貴之（株式会社大信技術開発）、長崎県教育委員会（順不同）

10 本書の編集は村子による。

目 次

卷頭図版

例 言

本文目次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第1章 調査の経緯(村子) ······ 1 p

 第1節 発掘調査にいたる経緯

 第2節 発掘調査の方法及び経過

 第3節 遺跡の地理的・地形的・歴史的環境

 第4節 基本土層

第2章 弥生時代 ······ 6 p

 第1節 掘立柱建物と竪穴住居(村子)

 第2節 龜棺墓(村子)

 第3節 環濠(村子)

 第4節 ウッドサークル(村子)

 第5節 佃遺跡出土の石包丁(辻田)

第3章 まとめ(村子) ······ 26 p

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図(1/20,000)	
第 2 図	調査区配置図(1/10,000)	2
第 3 図	遺構検出状況(1/2,500)	4
第 4 図	基本土層	5
第 5 図	77~81 区大型掘立柱建物・竪穴住居(1/600)	6
第 6 図	78 区 SB-1 検出状況(1/80)	6
第 7 図	80 区 SB-1 検出状況(1/80)	7
第 8 図	81 区 SB-1 検出状況(1/80)	7
第 9 図	71 区 SB-1 検出状況(1/100)	8
第 10 図	84 区 SB-1 検出状況(1/80)	8
第 11 図	71~84 区住居跡出土土器(1/3)	9
第 12 図	87 区 SB-1、2(1/100)	10
第 13 図	87 区 SB-1 出土甕棺(1/6)	11
第 14 図	87 区 SB-2 出土土器(1/3)	11
第 15 図	87 区住居跡出土土器(1/3)	13
第 16 図	54 区 1 カメ検出状況(1/30)	14
第 17 図	54 区・工事中出土甕棺(1/12)	15
第 18 図	25 区 1 カメ検出状況(1/20)	16
第 19 図	30 区 2 カメ検出状況(1/20)	17
第 20 図	31 区 1 カメ検出状況(1/20)	17
第 21 図	31 区 3 カメ検出状況(1/20)	17
第 22 図	25~31 区出土甕棺(1/6)	19
第 23 図	環濠(1/100)	20
第 24 図	ウッドサークル(1/50)	21
第 25 図	34 区ウッドサークル出土土器(1/3)	23
第 26 図	石包丁及び未製品(1/3)	25

表 目 次

第 1 表	佃遺跡出土石包丁計測表	24
第 2 表	出土遺物観察表	28、29

図 版 目 次

中表紙図版 遺跡上空写真（圃場整備事業の進行する佃遺跡・平成9年）

巻頭図版 77区～81区大型掘立柱建物と竪穴住居

14頁

54区1カメ検出状況

工事中出土甕棺

16頁

30区甕棺検出状況

25区1カメ

17頁

30区2カメ

31区3カメ

20頁

環濠土層堆積状況

環濠完掘状況

21頁

8区ウッドサークル検出状況

8区ウッドサークル杭痕

図版1

77区～81区大型掘立柱建物・竪穴住居

大型掘立柱建物（柱穴）

78区竪穴住居(SB-1)・80区竪穴住居(SB-1)

87区大型竪穴住居(SB-1)

54区～55区弥生甕棺墓・土坑墓

環濠

図版2

81区竪穴住居(SB-1)発掘風景

81区竪穴住居(SB-1)検出状況

8区ウッドサークル検出状況

34区ウッドサークル検出状況

54区1号甕棺検出状況

55区土坑墓検出状況

工事による甕棺の発見

調査風景

図版3

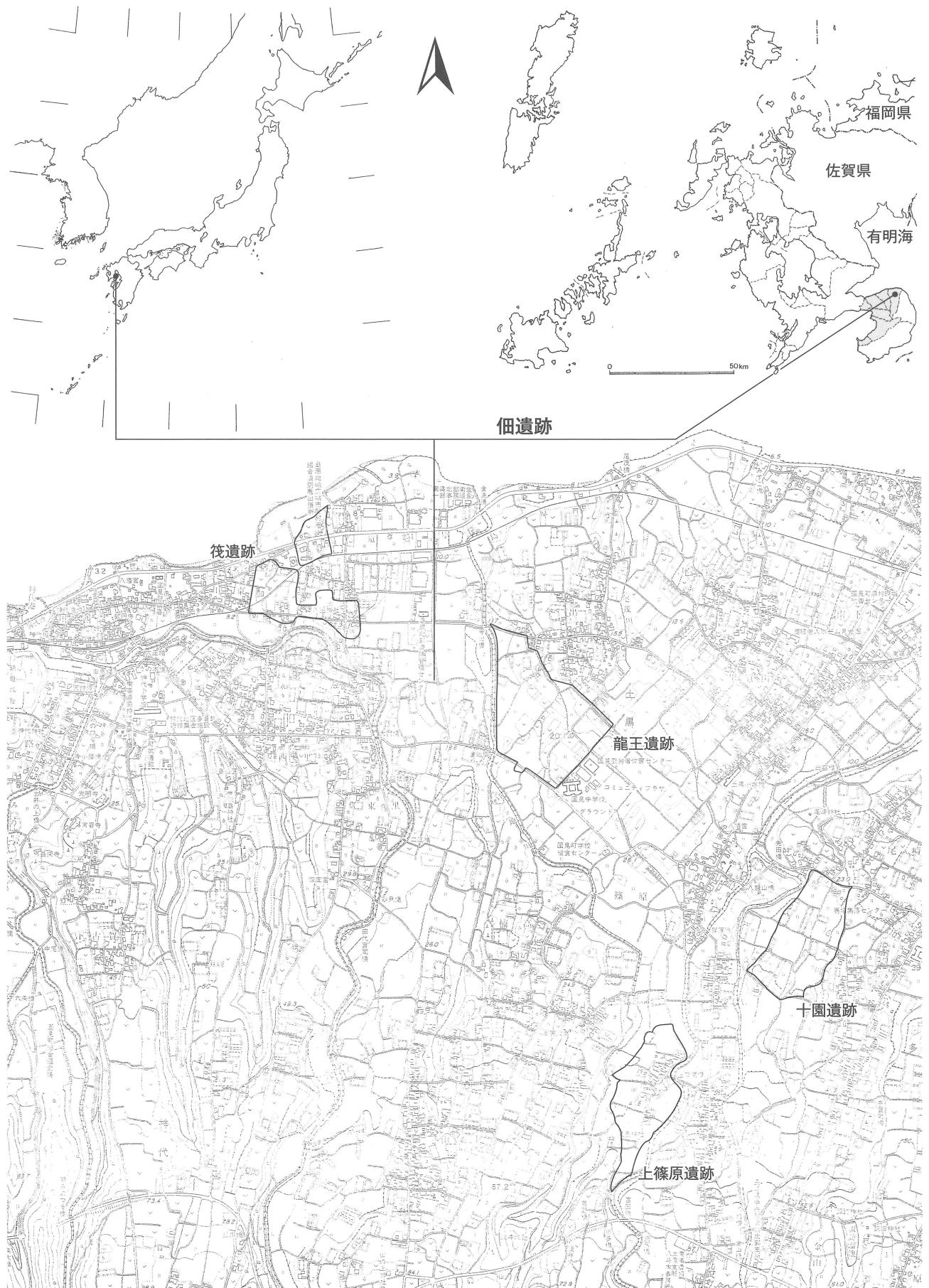
出土遺物

図版4

出土遺物

図版5

石包丁及び未製品



第1図 遺跡位置図 (1/20,000)

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査にいたる経緯

平成5年度に長崎県島原振興局より、神代地区県営圃場整備事業の計画があるとの紹介を受け、国見町教育委員会が主体となり平成6年度及び平成7年度に事業予定地内の遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、赤城遺跡が新たに発見され、佃遺跡の範囲が大きく拡大することとなった。調査の結果をもとに、島原振興局・国見町産業復興課・神代地区土地改良区・長崎県教育庁文化課(現学芸文化課)・国見町教育委員会(現雲仙市教育委員会)による協議の結果、設計変更により大部分は盛り土により保存を行うこととなったが、遺跡の消滅する部分について前面発掘調査を実施することとなった。本調査は平成7年度より順次を行い、平成10年度において全ての調査区の調査が完了した。今報告書では、佃遺跡で検出された弥生時代から古墳時代の遺物・遺構を報告する。なお、発掘調査は長崎県島原振興局より委託を受けて行ったものである。

第2節 発掘調査の方法及び経過（第1・2図）

本調査は旧日本測地系を使用し、調査対象範囲(農道・排水路建設及び圃場造成のために遺跡の消滅する範囲)を20mメッシュに区切り、1区から90区に区分して順次調査を実施した。しかしながら、調査区の立地条件などにより、必ずしも20mメッシュの調査区とはなっていない。

佃遺跡は平成5年度に農業用ビニールハウス(苺栽培)建設に伴って新規発見された遺跡である。佃遺跡は概ね水田として利用されているが、これまでにも数度の造成工事が実施されており、表土を除去すると遺物包含層がまったく存在せず、基盤層に掘り込まれた遺構確認面が露出する部分も少なくない。調査では重機により表土を除去した後、遺構確認面または遺物包含層上面まで再度重機により掘削を行っている。その後の掘削作業は概ね人力による。

遺構については、基本的には1/20の縮尺で手実測によるものである。ただし、遺構密度の薄い部分や逆に濃い部分については平板実測や1/10の縮尺による実測など、状況に合わせた記録を心がけた。

遺物については、包含層遺物は一括で取上げ、住居跡など遺構に関わるものについては可能な限り実測し取上げた。また、一部の遺物についてはドットマップを作成した。以下調査の概要を述べる。

前回の報告書(辻田 2008)において一部報告を行っているが、佃遺跡からは旧石器時代～近世までの多種・多様な遺構・遺物が検出されている。旧石器時代や縄文時代早期の遺物は他時期の遺物と混在する形で検出され、縄文時代晚期では埋カメが1基検出されている。弥生時代の遺構検出面の直下に検出されていることから、近隣に良好な晩期遺跡が存在することは間違いないであろう。弥生時代～古墳時代初頭にかけては多くの遺物・遺構が検出されている。弥生時代では中期後半～後期にかけての環濠集落が検出されている。2重に巡る環濠や径10mを超える大型の竪穴住居、甕棺墓群も検出されており、弥生時代の集落構造を考える上で貴重な資料となる。古墳時代初頭でも住居跡や廃棄土坑から古式土師器の一括資料が検出されており、当該期の土器編年に大きく寄与するものと考えられる。その他にも、9世紀～10世紀頃と考えられる掘立柱建物群や中世の大型の堀(幅5m、深さ2.5m)、龍泉窯系青磁碗の完形品など数多くの発見がなされており、佃遺跡は各時代において地域の中心的役割を果たしていたと考えられる。

【参考文献】

辻田直人 2008『佃遺跡』雲仙市文化財調査報告書(概報) 第4集 長崎県雲仙市教育委員会

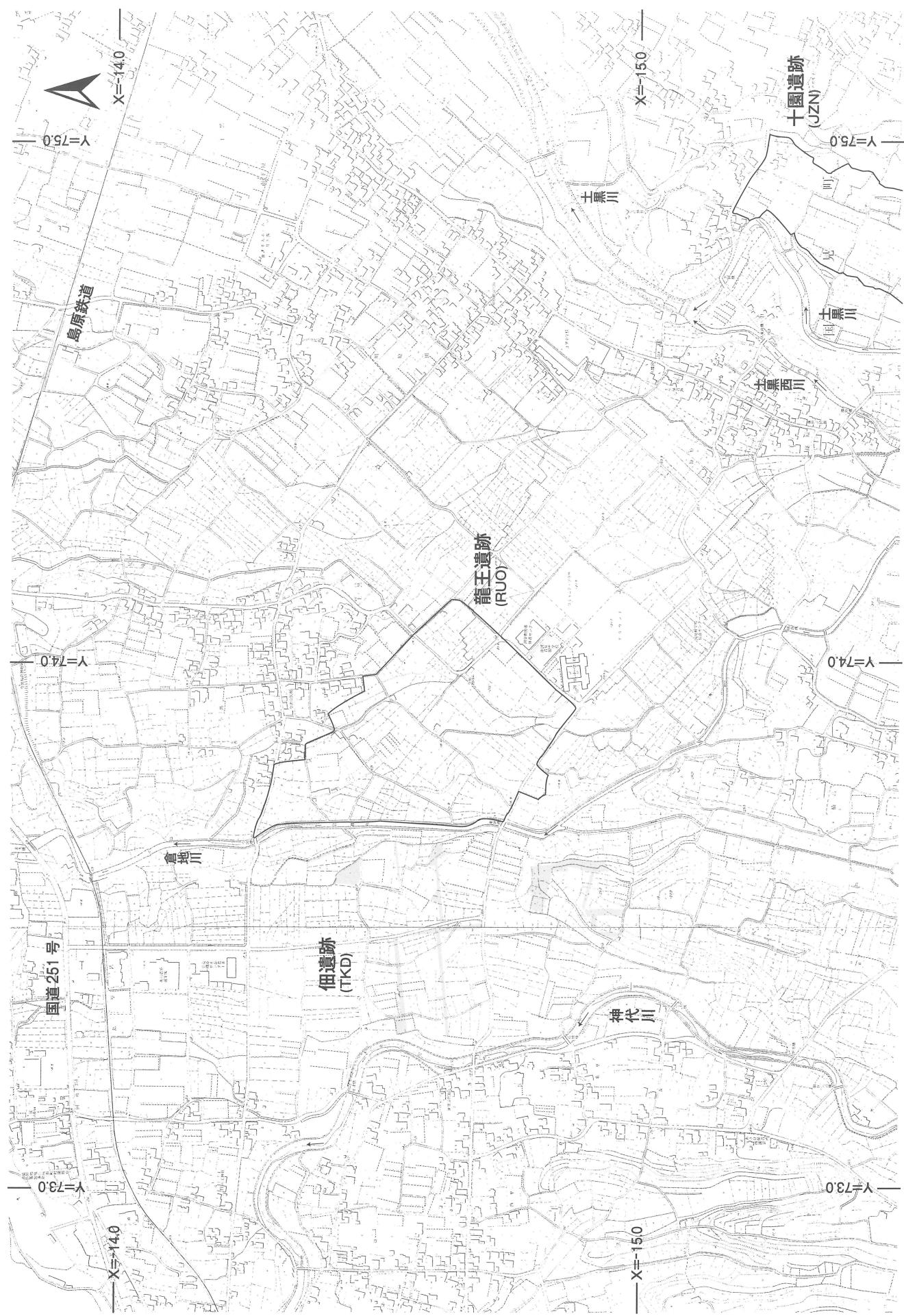
第3節 遺跡の地理的・地形的・歴史的環境（第1・2・3図）

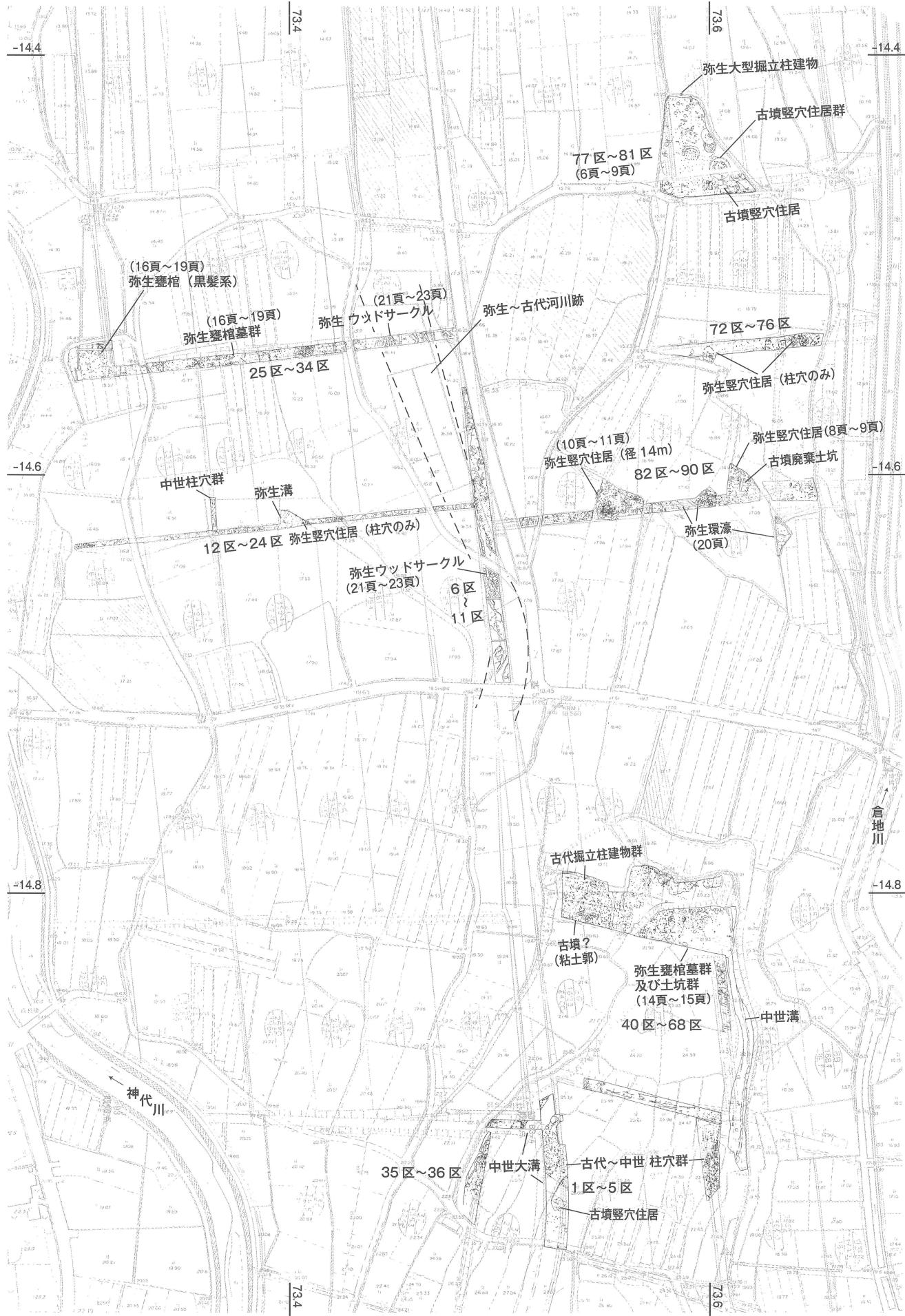
佃遺跡は島原半島の最北端、雲仙岳より伸びる細長い丘陵の先端部分からその先に広がる平野部に位置する。標高は15～20mで、500mほど北には有明海が広がる。半島内でも最大規模の平野部にあり、古代条里の地割を良く残し、現在でもそのほとんどが水田として利用されている。丘陵先端部からは甕棺墓群や中世堀跡などが検出され、平野部では環濠集落や古代掘立柱建物群などが検出されており、時代や場所によって場の利用の変化が見られる。遺跡の西側には神代川、東側には倉地川が流れ、遺跡の地形断面は扁平な蒲鉾型を呈す。神代川から倉地川までの間は400mほどあり、遺跡はその全域に展開する。特に弥生時代中期後半～後期前半の環濠集落を伴う集落跡は全面に広がっており、遺跡範囲が最大になる時期である。また、その時期には南側丘陵西縁直下を通り、遺跡中央を縦断するように旧河川が検出されている。河川堆積の最下層からは弥生土器が、最上層からは古代須恵器が大量に出土しており、環濠集落の存在する時期には比較的水量のある河川であり、古代まで河川として機能していた様子が伺える。神代川の西側は現在集落となっている。しかし、佃遺跡と比較すると若干標高が高く、水田は無く畠地しか見られない。この様な地理的景観は、佃遺跡が最も繁栄した弥生時代も同様と考えられる。また、神代川は倉地川やさらに東側を流れる土黒川に比べると比高差が小さいことから、先に述べた遺跡中央を縦断する旧河川と密接に関連すると思われる。現在の神代川より西側は標高が高く、神代川の氾濫原は最も西側で現在の神代川付近、東側は佃遺跡南側の丘陵が伸びてきているおかげで、遺跡中央までと想定される。調査では現在の神代川に近い調査区で、河川堆積と考えられる礫層の直下から甕棺墓が検出されたり、河川堆積と考えられる土層から多くの弥生土器が検出されている。このことから弥生時代には現在の神代川付近にも河川が流れしており、当時は現在の神代川と遺跡中央の2本の河川が流れていたことが想定される。また、佃遺跡を東西に走る道路は古代官道と想定されている。そのため、古代条里制整備の際に本来2本あった河川を現在の神代川1本に集約した可能性もある。佃遺跡の平野部では古墳時代初頭から中世の龍泉窯系青磁碗破片を一括廃棄するピットまでの間の遺構がほとんど見られない。南側丘陵の先端から1段下がった平坦部分（平野部より標高が高い）には9世紀～10世紀頃と考えられる掘立柱建物群が検出されている。また、丘陵上からは龍泉窯系青磁碗完形品の埋設される溝や、中世頃と考えられる幅5m、深さ2.5mの逆台形の堀切跡が検出されており、平野部ではなく丘陵部付近に居住地が動いている様子が伺える。また、倉地川を挟んで対岸の龍王遺跡（辻田・小野 2008）では古墳時代の豪族居館や弥生時代終末～古墳時代初頭の集落が検出されており、佃遺跡の集落は弥生時代の終末には衰退し、東側の龍王遺跡へその中心が移っているようである。これらのことから、佃遺跡は弥生時代終末期には居住地ではなく水田などの食糧生産の場に変化しつつあり、その後古代において条里制の整備が行われたと考えられよう。また、中世鎌倉時代になると、平野部にも何かしらの建造物を構築するようになることも調査の結果から見てとれる。この様に佃遺跡から検出された多くの遺構・遺物は近隣の遺跡と密接に結びついて推移しており、1つの遺跡としてではなく、地域全体の歴史を検証しうる遺跡として重要な役割を担う。また、1kmほど東側では肥前国高来郡郡衙関連遺跡である十園遺跡（辻田・竹中 2004）があり、8世紀代の掘立柱建物群が検出されており、佃遺跡周辺では検出されない時代が補完される。

【参考文献】

- 辻田直人・竹中哲郎 2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第4集 長崎県国見町教育委員会
辻田直人・小野綾夏 2008『龍王遺跡III』雲仙市文化財調査報告書第3集 長崎県雲仙市教育委員会

第2図 調査区配置図 (1/10,000)





第4節 基本土層

第4図に基本土層図を示す。基本的には8層に分けられる。佃遺跡は水田として利用されているため、著しく削平を受けている部分も存在した。調査においては、ナイフ形石器や押型文土器など旧石器時代や縄文時代の遺物も散見されるが、調査を行った範囲内ではそれに相当する包含層の検出には至らなかった。ほとんどの地点で弥生時代及び古墳時代の包含層が薄く残り、その下層は弥生・古墳の遺構確認面となる。以下、柱状図にしたがって詳細を述べる。

第I層—厚さ15cm～20cm程の水田耕作土。

第II層—水田耕作土直下に一般的に見られる赤褐色の硬質土層で、厚さ5cm程の水田床土である。

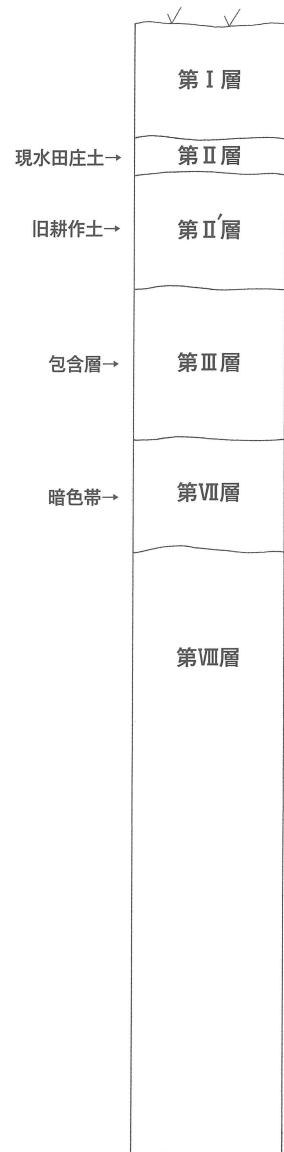
第II'層—旧耕作土及び旧水田床土。場所によっては数層にわたって検出される部分もあり、これまでの水田整備の痕跡を示すものである。

第III層—ややしまりのある黒色土で、弥生時代～古墳時代の遺物包含層である。地点によっては削平されてしまっている部分も多い。

第VII層—AT下位の暗色帶。地点によっては削平された部分も多い。上面が弥生・古墳の遺構検出面となるが、遺構内の埋土も同様な黒色土であり、調査においては第VII層を除去して初めて遺構が検出される部分も見られた。

第VIII層—AT下位の暗色帶の下位に見られる、黄色の粘質土層。堆積が厚く数mを超える部分もある。第VII層が削平されている部分では上面が遺構検出面となり、黄色の検出面に黒色の遺構が明瞭に検出されるため遺構の検出は容易であった。

雲仙市国見町周辺の発掘調査では、百花台遺跡群の土層堆積を基本として調査を行っている。佃遺跡第VII層及び第VIII層はいずれも百花台遺跡群の第VII層・第VIII層に相当し、佃遺跡第III層より上層は、百花台遺跡群では存在せず、アカホヤ火山灰を含む第II層よりも上位の堆積となる。佃遺跡東側の龍王遺跡では、百花台遺跡第VI層と同様のAT火山灰を含む硬質の茶褐色土層も検出されており、佃遺跡でも部分的には土層が残存している可能性もある。佃遺跡の広がる平野部は龍王遺跡に比べるとやや低い位置にあたり、遺跡のすぐ両側には神代川や倉地川が流れ、調査においては遺跡中央部分でも旧河川が検出されているように、龍王遺跡よりも河川の影響を受けやすい立地条件であったと考えられ、土層の発達の妨げとなつたのであろうか。



第4図 基本土層

【参考文献】

- 田川 肇・福島和明・判耕一郎 1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第92集 長崎県教育委員会
- 田川 肇 1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第116集 長崎県教育委員会
- 辻田直人 2007『龍王遺跡II・真正寺条里跡』雲仙市文化財調査報告書(概報) 第2集長崎県雲仙市教育委員会
- 辻田直人 2008『佃遺跡』雲仙市文化財調査報告書(概報) 第4集 長崎県雲仙市教育委員会

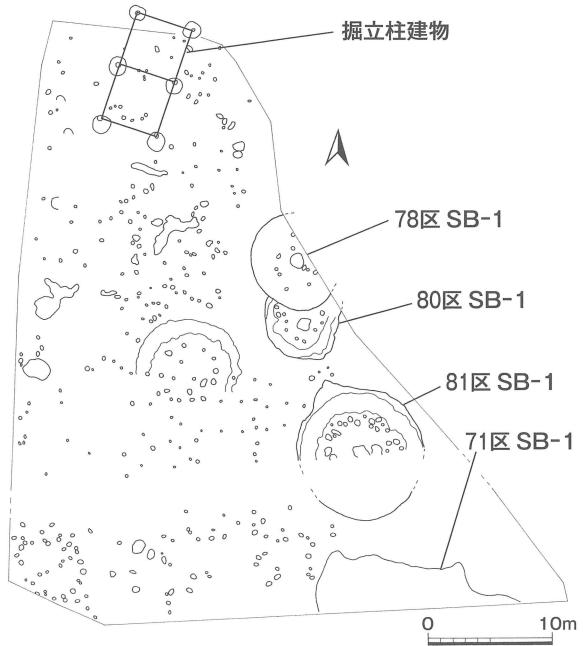
第2章 弥生時代

第1節 掘立柱建物と竪穴住居

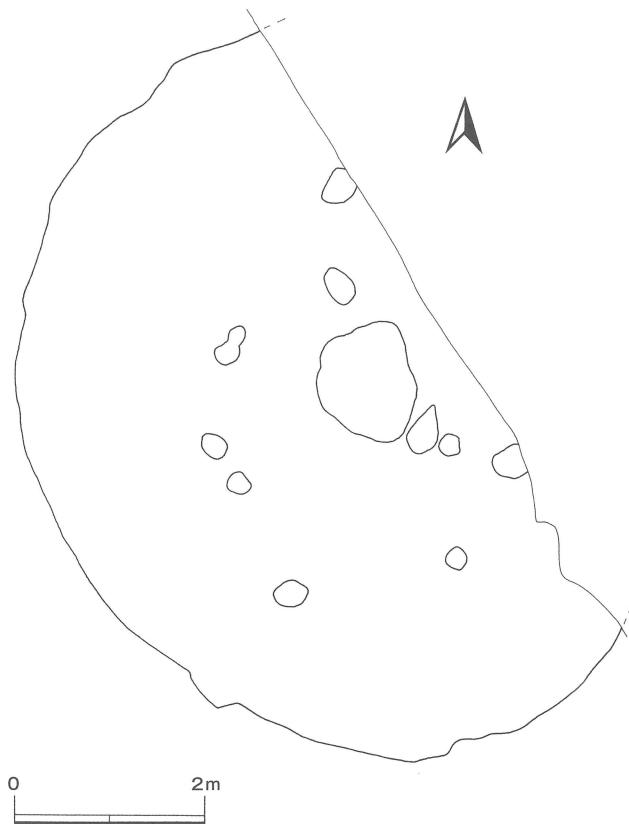
遺跡の最も北側からは大型掘立柱建物と弥生時代中期後半～古墳時代初頭の竪穴住居群が検出されている。

掘立柱建物

掘立柱建物は竪穴住居群から 10mほどの距離で検出されている。建物の規模は 1 間×2 間で、桁行 9m、梁行 4.72m、柱穴は径 1.3m、深さは最深 1m である。ほぼ円形に掘り込まれており、一部の底面には柱の立つ部分のみ 10cmほど 2段掘りとなっている。柱材は残存していないが、痕跡は確認されており、柱は径 40cm 前後に復元されると考えられる。柱穴からはほとんど遺物は出土しておらず、時期の特定が難しいが、柱穴と竪穴住居の内部の土層の状況が酷似しているため、ほぼ同時期に存在していたものと想定される。



第5図 77～81 区大型掘立柱建物・竪穴住居(1/600)



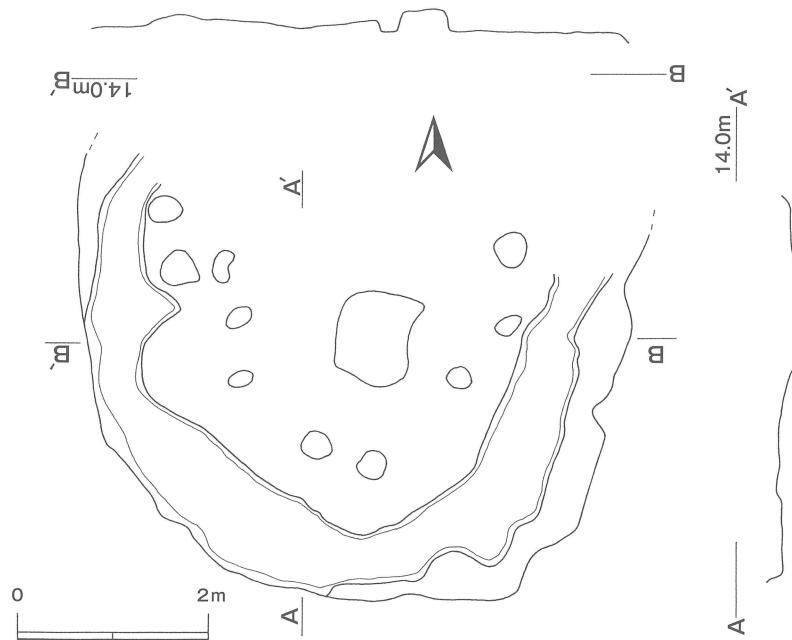
第6図 78区 SB-1 検出状況(1/80)

78区 SB-1

掘立柱建物から東南に約 10m 離れた地点から検出された。住居は調査区外まで広がるため全體の形状は把握できないが、おそらく円形の竪穴住居であったと想定される。直径約 8m で、中央には大きな土坑があり、土坑を中心として柱穴が並んでいるのが検出されている。遺構上面は後世の削平などによって大部分が削られており、他の竪穴住居跡で検出されたような柱穴と住居壁面の間の浅い溝状遺構は確認できなかった。住居内からは焼土も検出されなかった。また、80区 SB-1 の北側半分が 78区 SB-1 によって切り合っていることから、80区 SB-1 の埋没後、78区 SB-1 が建てられたようである。住居内からは遺物の碎片が多く出土しており、完形に復元できるものは少ないと想定される。

80 区 SB-1

円形の竪穴住居である。中央には土坑が検出されており、土坑を中心柱穴が巡る。床面には張り床が確認され、張り床を剥ぐと、柱穴と住居壁面との間に浅い溝状の遺構が検出された。遺構内からは脚台付甕やミニチュア土器などが出土している。また、遺構の北側を78区SB-1によって切られているため、この住居は78区SB-1が建てられる以前のものと思われる。



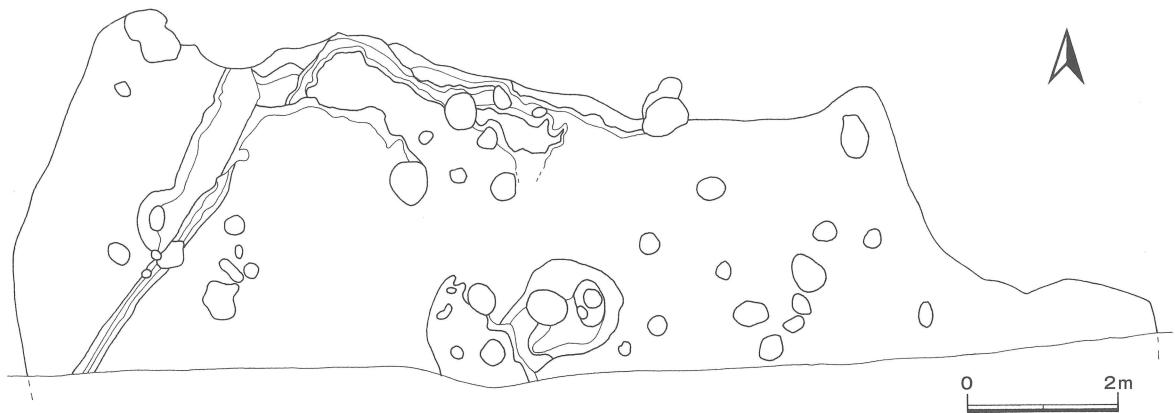
第7図 80区SB-1検出状況(1/80)



第8図 81区SB-1検出状況(1/80)

81 区 SB-1

直径約 10m の平面形状が円形の竪穴住居である。住居跡中央に土坑、土坑を中心として柱穴が円形に巡り、床面には張り床が確認されている。また、張り床の下の柱穴と住居壁面との間には浅い溝状遺構が検出されており、前述した住居跡と同様の構造となる。遺構上面は大部分が削平を受けており住居壁面の立ち上がり部分が 10 cmほどしか残存していない。また、床面からは焼土や炭化物などが多く検出されており、遺物は完形のものは少なく、細片が多く出土していることから、この住居は、焼失してしまった後にそのまま放置されたものではなく、きれいに片付けられたものと考えられる。



第9図 71区 SB-1 検出状況(1/100)

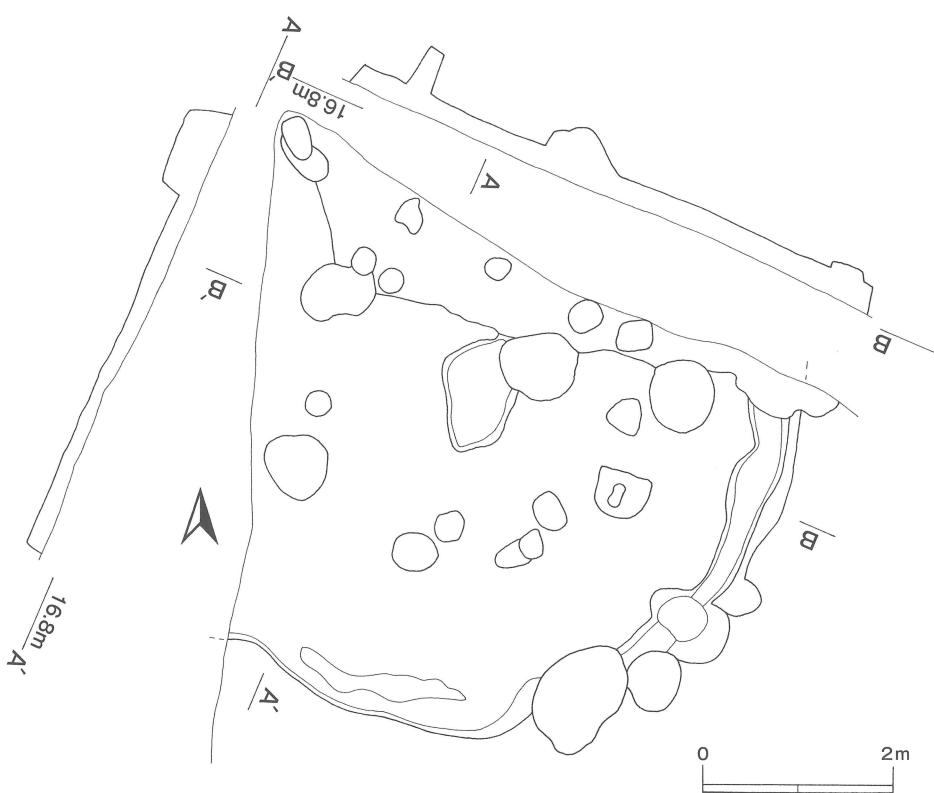
71区 SB-1

古墳時代初頭の竪穴住居である。81区 SB-1 から南に約 3m 離れた地点から検出された。一部が調査区外へ広がるため全体の形状は不明であるが、ややいびつな形状である。遺構内からは溝状遺構が L字型に 2 条検出されており、竪穴住居の壁面立ち上がり部分の溝と考えられることから、古墳時代初頭の方形の竪穴住居がいくつも切り合っているものと考えられる。また、遺構内からは焼土やピットなどが検出されており、

ピットは竪穴住居に伴う柱穴とも考えられる。

84区 SB-1

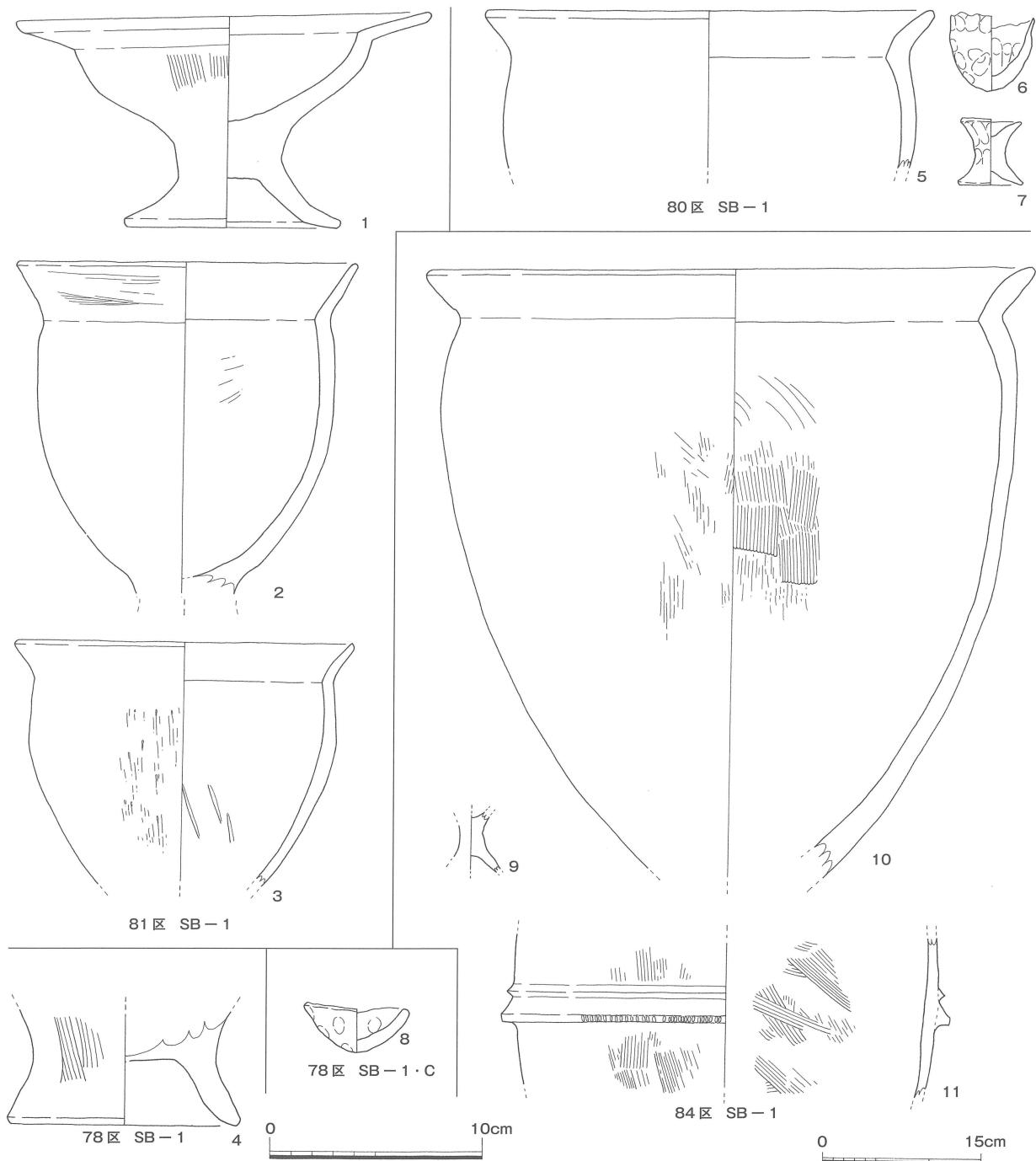
前述した竪穴住居群から南へ約 130m 離れた地点から検出された。一部が調査区外へ広がるため全体の形状は不明であるが、おそらく平面形状は円形の竪穴住居と思われる。住居の中央部分には土坑が検出され、その土坑を中心には柱穴が巡る。張り床も検出されており、張り床を剥ぐと、柱穴と住居壁面との間に浅いレンズ状の溝が検出されている。住居内からは、脚台付甕などが出土している。



第10図 84区 SB-1 検出状況(1/80)

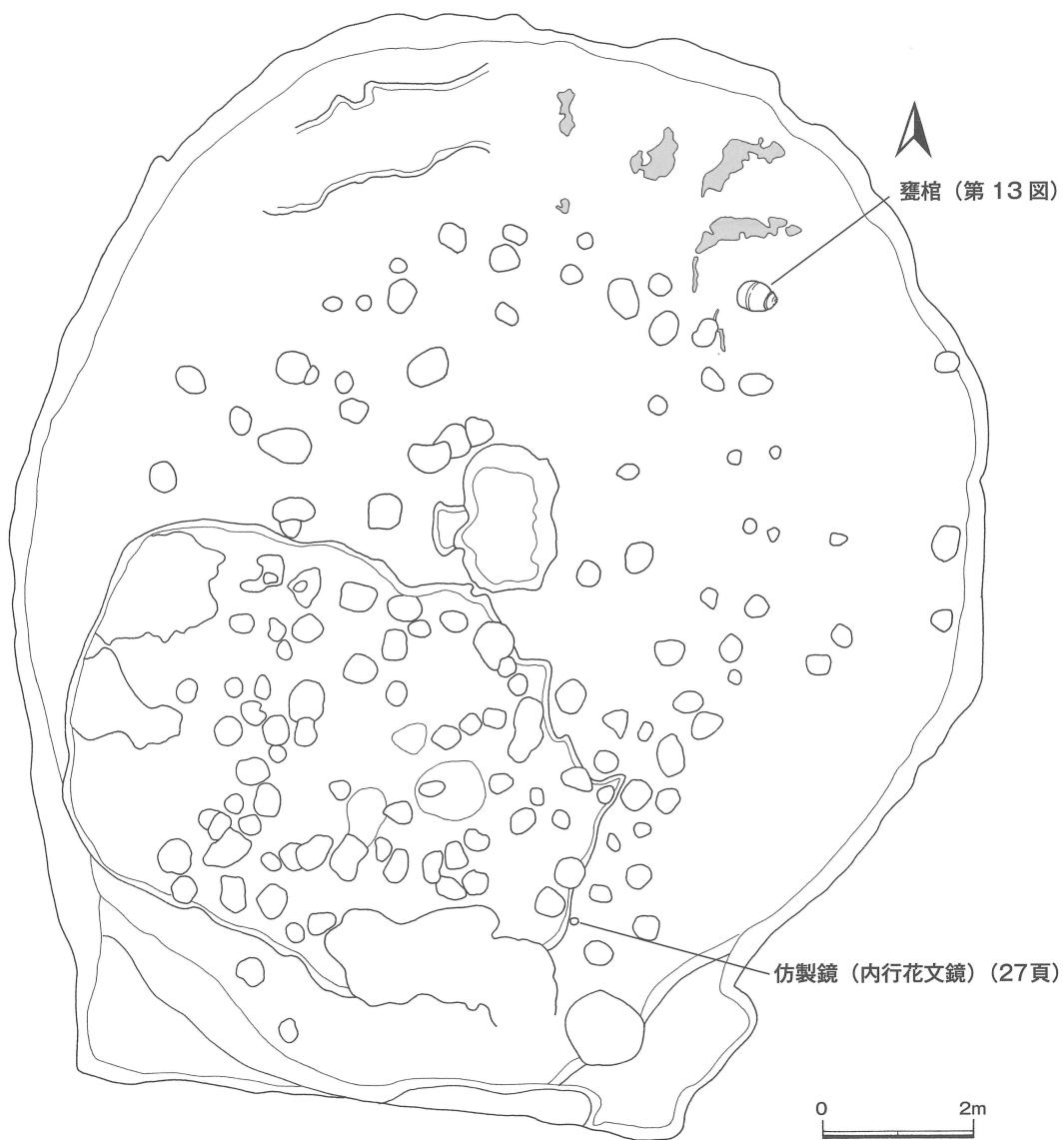
—出土土器—

1 は高壺である。裾部はハの字に開き、壺部に続く。壺部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部で「く」の字に外反し、外面は縦位のハケとナデ、内面はナデを施している。2 は脚台付甕である。胴部下位から頸部までは内湾しながら、頸部から口縁部は外反する。3 は脚台付甕である。胴部から頸部まではゆるやかに立ち上がり、口縁部は「く」の字に開く。内面は横位のナデで胴部中央に 2cm ほどの沈線が確認でき、外面は口縁部が横位のナデ、胴部は縦位のハケ後にナデを施している。4 は脚台付甕の脚台部分である。外面は縦位のハケ後にナデ、内面はナデを施している。5 は脚台付甕である。胴部上位から頸部までゆるやかに立ち



第11図 71~84区住居跡出土土器(1/3)・甕棺(1/6)

上がり、頸部から口縁部は外反する。内外面ともにナデを施している。6~9はミニチュア土器である。6は底部が丸底の浅鉢で底部から口縁部まで手捏ねで指頭圧痕、ナデが残る。外面には一部丹塗りがみられる。7は器台である。裾部から受部まで手捏ねで、内外面ともに指頭圧痕・ナデが残る。外面半分ほどには焼成時に付着したと思われるススがみられる。8は底部が丸底の浅鉢である。底部から口縁部まで手捏ねで、内外面ともに指頭圧痕、ナデが明瞭に残る。9は器台である。脚台部のみ残存しており、手捏ねで指頭圧痕・ナデが残る。10は脚台付甕である。胴部下位から口縁部までゆるやかに立ち上がり、口縁部は「く」の字を開く。内面は胴部上半に縦位のハケ、胴部中央から胴部下半は縦位のハケ後にナデ消し。外面は縦位のハケ及び不定方向のハケ後にナデ消しが施され、胴部下半は二次的被熱で器壁が崩壊している。11は甕棺胴部の一部である。外面には刻目突帯と三角突帯の2条がめぐる。外面は縦位のハケ後にナデ、内面は斜位のハケ後にナデを施している。



第12図 87区SB-1、2(1/100)

87区SB-1

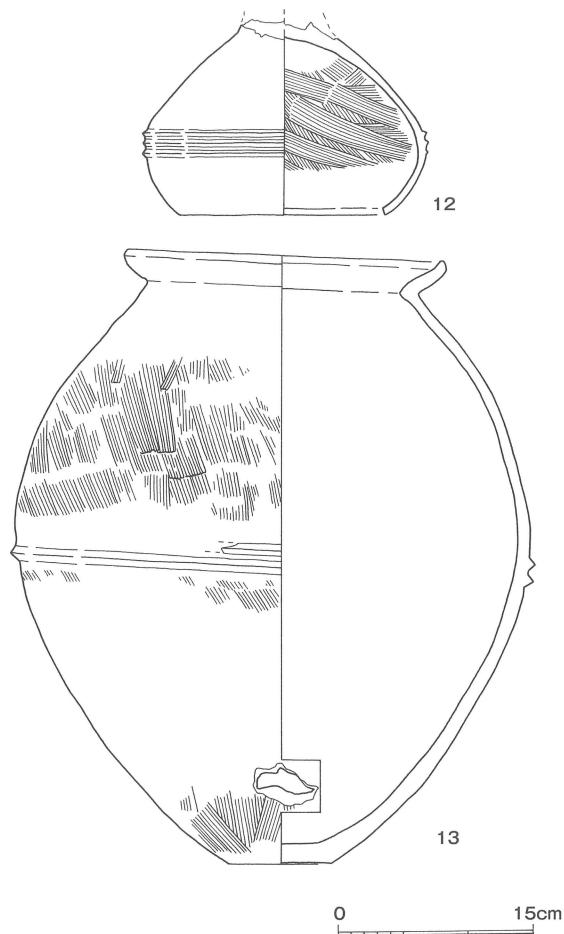
佃遺跡で検出された堅穴住居の中で一番大型である。これまで報告した77区～81区の住居跡から南側に200mほど離れた地点に位置している。平面形状は「帆立貝」型に類似しており、長軸約14.5m、短軸約13mを測る。立ち上りは50cmほど残存しており、住居跡の中央に土坑、円形に巡る柱穴列、張り床、張り床下の溝状遺構が検出されている。床面直上からは、小児瓈棺(第13図12,13)・仿製鏡(内行花文鏡)・丹塗りの壺(第15図23)などが出土しており、住居を廃棄する際に内部に残されたものと考えられる。また、瓈棺が検出された住居北側からは炭化材や焼土などが検出されていることから、住居を廃棄する際に火を使った祭祀的な行為を行い、鏡や丹塗り土器と共に瓈棺を埋納した様子が伺える。この堅穴住居は検出された中では最も大きく、住居内からは鏡や丹塗り土器及び瓈棺が出土していることから、集落の中でも中心的な人物の住居であったと思われる。

87区SB-2

87区SB-1内から検出された。平面形状は隅丸方形に近く、住居内からは弥生時代中期後半～後期前半の丹塗りの壺や瓈(第14図14,15)が出土している。住居跡のプランは、87区SB-1の検出面よりも下層から検出されている為、87区SB-1を建てる以前の住居跡と考えられる。

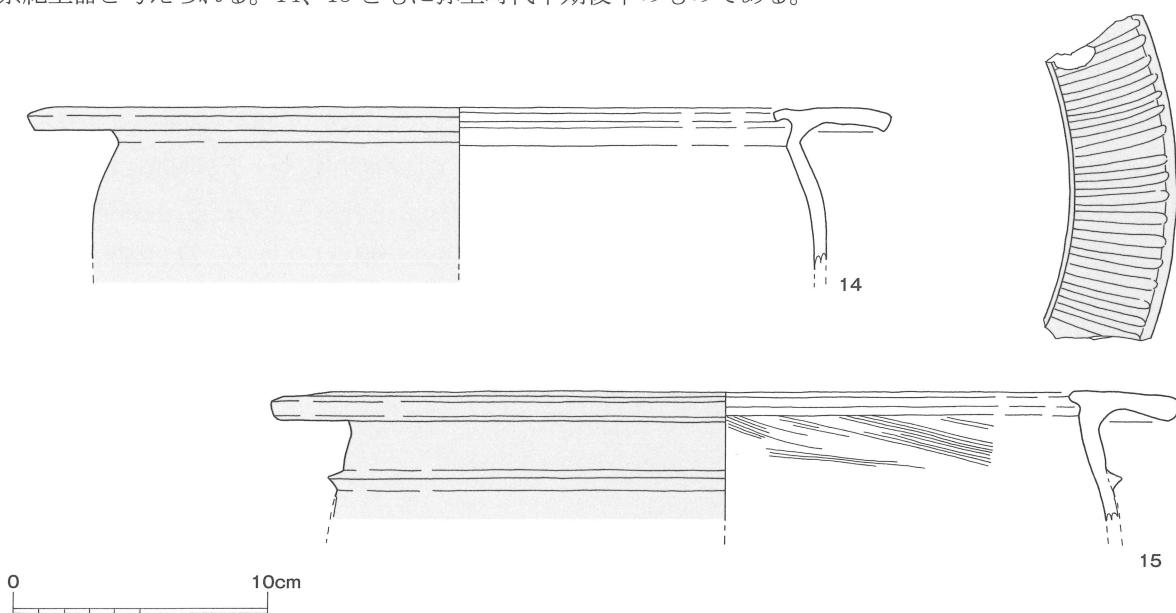
—87区SB-1出土甕棺—

12は上甕である。胴部下位から胴部中位にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部まで内湾しながら立ち上がる。胴部中位に最大径をはかり、三角突帯が3条めぐる。外面はハケ後にナデ、内面は口縁部から胴部上位までハケ後にナデ、胴部中位から下位まではハケ、底部はハケ後にナデを施している。胴部下位から底部にかけて焼き割れが見られる。13は下甕である。底部は平底で胴部下位から頸部にかけて内湾しながら立ち上がる。胴部中位に最大径を計り、外面には三角突帯が2条めぐる。2条の突帯のうち1条は1/3程剥がれています。頸部はくびれ、頸部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。胴部下位中央には穿孔がみられる。外面は突帯の上位には斜位のハケ、下位はナデ、底部には斜位のハケが、内面にはナデが施される。上甕、下甕ともに弥生時代後期のものでどちらも胎土は白っぽい。



—87区SB-2出土土器—

14は丹塗りの甕である。口縁部は鋤先形で、やや下に垂れており、内外面ともにナデ。外面には丹塗りが施され、祭祀土器として使用されていたと考えられる。器壁は口縁部が最も厚く、胴部上位は薄くなる。15は丹塗りの甕である。口縁部は鋤先形で、口縁部外面には暗文が施され、胴部外面の上部には三角突帯が1条めぐる。口縁部はやや下に垂れ下がり、器壁は口縁部が最も厚く、胴部上位は薄い。丹塗りであるため、祭祀土器と考えられる。14、15ともに弥生時代中期後半のものである。

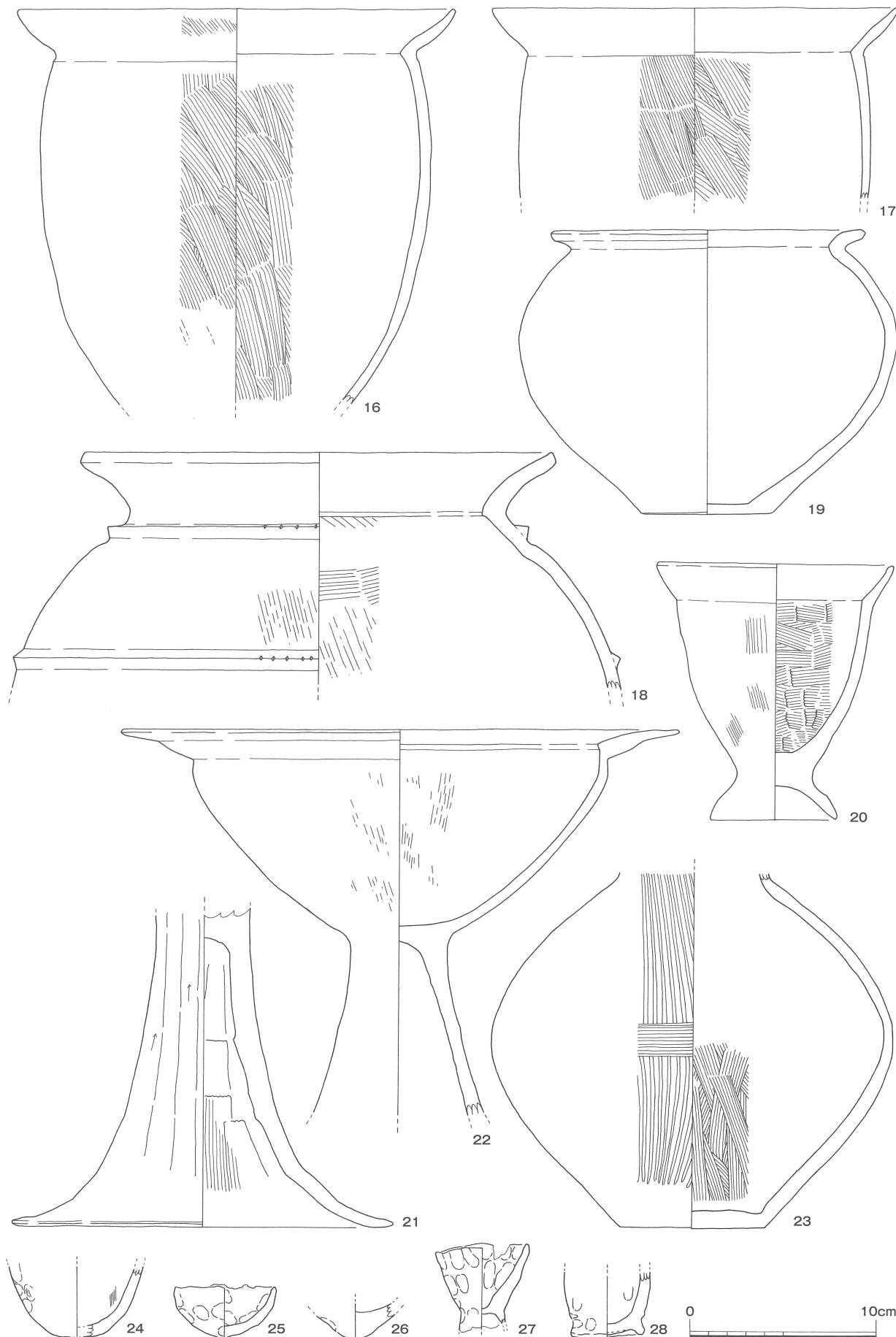


第14図 87区SB-2出土土器(1/3)

—87 区 SB-1 出土土器—

16は脚台付甕である。胴部は張らず「く」の字に開いた口縁部は先端部を持ち上げるように若干内湾する。外面は全体に縦位のハケ後に、頸部のくびれ部分及び胴部下半はナデを施しており、内面は口縁部付近が横位のナデ、胴部内面は縦位のハケを施している。17は脚台付甕である。胴部上位から口縁部にかけて残存している。胴部は張らず、直線的に立ち上がり、口縁部はするどく屈曲し「く」の字に開きやや内湾する。口縁部は内外面ともに丁寧な横位のナデ。胴部は内外面ともにハケを施している。18は広口壺の口縁部から胴部上半にかけての資料である。やや肩が張りぎみに立ち上がり、口縁部は「く」の字に大きく開きやや外反する。口唇部は上に引き上げる。頸部のくびれの下と肩の部分に三角突帯(貼り付け)をめぐらせ、5mm~10mmごとに小さい刻目を入れる。19は丹塗りの短頸壺である。底部は平底で底部から胴部までは外反に立ち上がり、胴部から頸部にかけては内湾する。口縁部は「く」の字に外反し開く。内面はナデ、外面及び内面の口縁部下2cm付近まではヘラミガキにより研磨され、その研磨部分のみ丹塗りが施されている。丹塗りは底部付近になるほど崩落がひどい。又、内外面とも異色に変色している部分があり焼成後のものと考えられる。弥生時代中期中頃~後半のものと思われる。20は脚台付甕である。脚台がやや内湾ぎみにハの字を開く。胴部は張らず内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はゆるく「く」の字に開く。口唇部は丸くおさめ内面に段を持つ。口縁部は横位のナデ、胴部外面は縦位のハケ後にナデで仕上げる。胴部から底部の内面には短いストロークの横位のハケが顕著である。21は高坏の脚柱部である。裾部はハの字にゆるやかに広がる。外面には縦位のケズリが、裾部にはナデが施されている。内面にも縦位のケズリとハケが、裾部はナデが施されている。

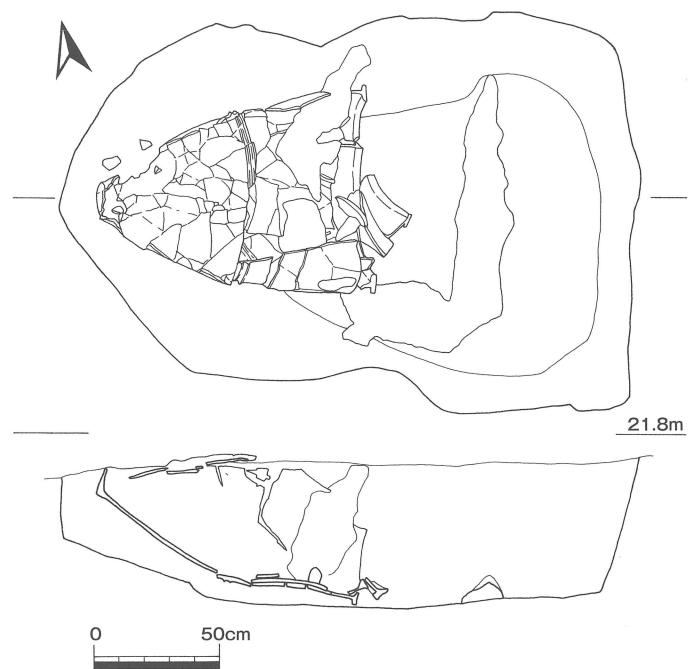
22は高杯である。大きく広く裾部を持つと考えられるが、その部分は欠損している。ハの字にゆるやかに広がる脚部に大きく開く坏部が続く。坏部はゆるやかに内湾しながら大きく開き口縁部に達する。口縁部は大きく「く」の字に開き、先端部は薄くなる。口唇部上面は丁寧な横位のナデによりくぼんでいる。又、坏部との接合面が内面に残る。23は丹塗りの袋状口縁壺である。底部は平底で、底部から胴部中位まではやや外反ぎみに立ち上がり、胴部中位から頸部下までは内湾しながら立ち上がる。外面は全体的に横位のケズリにより形成し、胴部と頸部のくびれ部分から底部上に2.5cmの部分に2分割して上から下方向にヘラミガキを行う。その後、胴部最大径部分に横位のヘラミガキを施し胴部上下の縦位のヘラミガキの分割部分を消してしまう。内面は底部から全体的にハケ。その後底部は指頭によりナデ、胴部最大径よりも上の部分についてもナデ消し。外面はかなり厚く丹塗りが施されており、崩落なども見られない。内面は残存状況から胴部と頸部のくびれ部分より上は丹塗りが施されていた形跡がある。弥生時代後期のものと思われる。24~28はミニチュア土器である。24は浅鉢で底部は丸底である。底部から口縁部にかけて手捏ねで作られており、内外面ともに指頭圧痕が残る。内外面ともに縦位のハケ後にナデを施している。25は浅鉢で底部は丸底である。底部から口縁部まで上へとつまみあげて作られているため内外面ともに指頭圧痕やナデが明瞭に残る。手捏ね土器である。26は底部から胴部下位にかけて残存しており、その形状から浅鉢と思われる。底部が分厚く、手捏ね土器である。外面は指頭圧痕とナデが残り、内面は指頭圧痕をナデ消ししてある。27は脚台付の鉢である。全体的に磨耗している。脚台の接合部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。手捏ねで内外面ともに指頭圧痕が残る。28は底部から胴部中位にかけて上へとつまみあげて作られているため、指頭圧痕やナデが残る。底部は後付けと考えられ、底部内面には粘土の塊が付着している。



第15図 87区 住居跡出土土器 (1/3)

弥生時代 13

第2節 蔕棺墓



第16図 54区1カメ検出状況(1/30)



54区1カメ検出状況



工事中出土甕棺

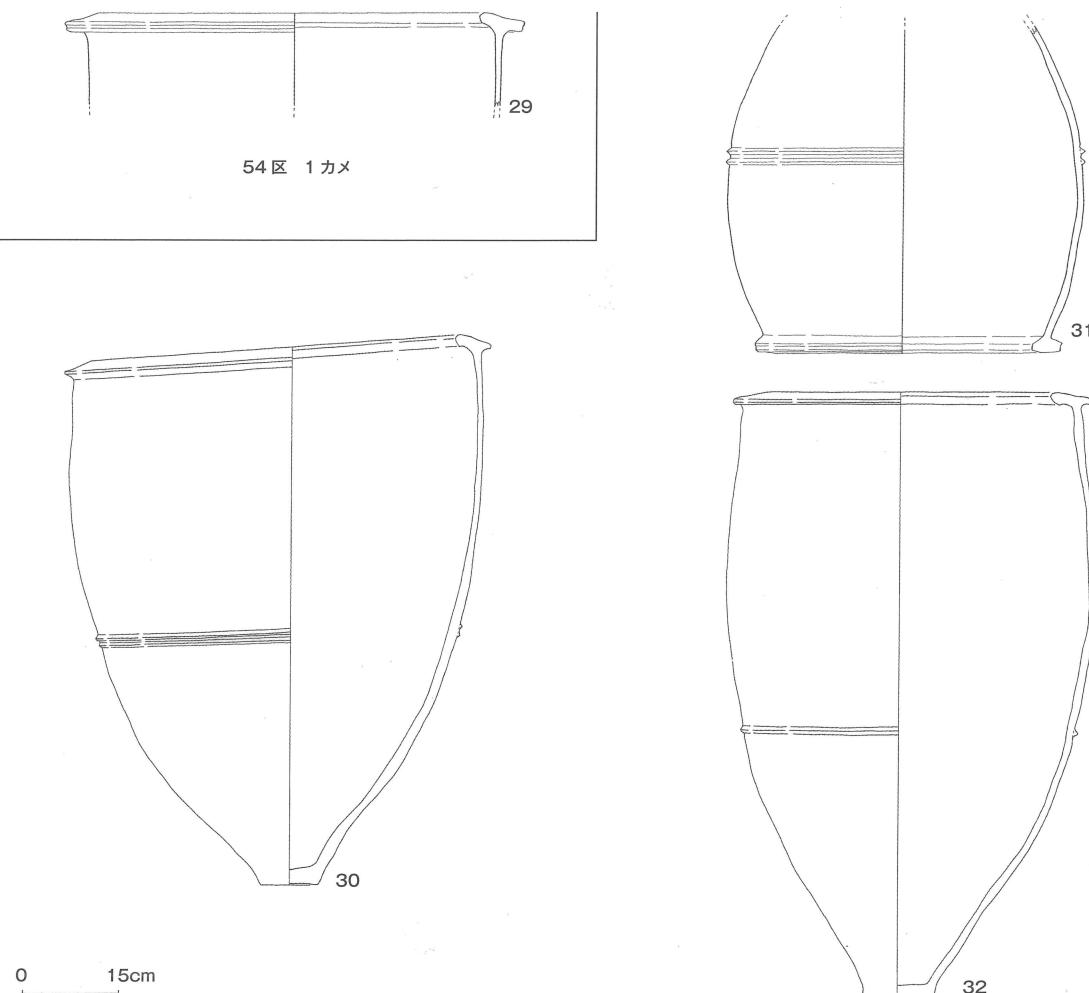
佃遺跡の墓制は甕棺墓、壺棺墓、土坑墓で構成されており、墓域は遺跡の丘陵先端部(54区～63区)と平野部(25区～31区)の2地点から検出されている。

54区～63区

甕棺墓、土坑墓、壺棺墓が検出されている。54区1カメは単甕で、成人用の甕棺と思われる。甕棺墓内からは遺物は出土していない。弥生時代中期後半の須玖式の特徴を持つ。甕棺の口縁部付近には白い粘土郭が残存しており、木製の板のようなものが蓋として使用されていた痕跡と思われる。甕棺墓周辺からは壺棺墓、土坑墓などが検出されている。佃遺跡では、甕棺墓の数よりも土坑墓の数が圧倒的に多いことから、土坑墓が一般的に用いられ、甕棺墓などは比較的地位の高い人の埋葬に使用されていたものと思われる。また、54区の南側の工事では、重機で掘削した際に甕棺2基が検出された。1つは単甕(第17図30)、もう一つは合わせ口甕棺(第17図31、32)である。どちらも弥生時代中期後半の須玖式の特徴を持つ甕棺で、54区1カメとほぼ同時期のものと思われる。

—出土甕棺—

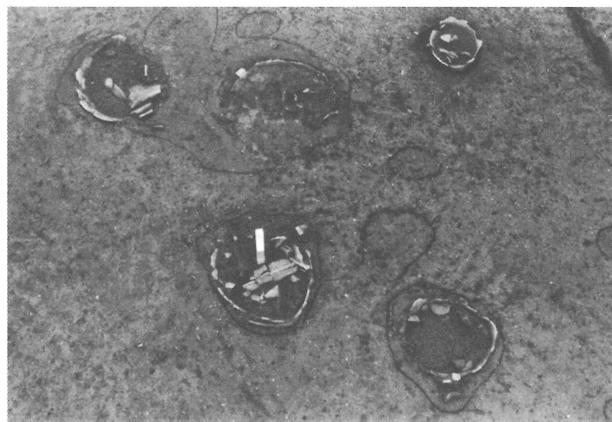
29は甕棺である。本来はほぼ完形と思われるが、今回は口縁部～胴部上位にかけてのみ実測を行った。底部は平底で小さく、外反しながら胴部中位にかけて立ち上がり、胴部中位から胴部上位にかけてはやや内湾しながら立ち上がる。胴部中位よりもやや下位には三角突帯が二条めぐり、口縁部は鋤先形で、内外面ともにナデを施している。甕棺の形状から弥生時代中期後半の須玖式のものと考えられる。甕棺は単体で全長は約100cm程であるため、成人棺と思われる。30は単体の甕棺である。底部は平底で、頸部までゆるやかに内湾しながら立ち上がる。胴部中央には、三角突帯が2条めぐり、胴部上位が最大径を測る。口縁部は鋤先形で、内外面ともに丁寧なナデで仕上げられている。弥生時代中期後半の須久式の甕棺と思われる。31、32は合わせ口甕棺である。31は上甕で、胴部下位から底部にかけて欠損している為、底部の形状はわからない。胴部下位から頸部にかけては、ゆるやかに内湾しながら立ち上がり、胴部中位には2条の三角突帯がめぐり、胴部中位に最大径を測る。口縁部は鋤先形で、全体の形状は丸みをおびており卵型のようである。器壁は全体的に均一だが、口縁部は厚い。内外面ともに丁寧なナデを施している。弥生時代中期後半の須玖式の甕棺と思われる。32は下甕で底部は平底である。胴部下位から底部にかけてすぼまるが、胴部下位から頸部まではゆるやかに内湾しながら立ち上がる。胴部中央下位には1条の三角突帯が貼り付けられており、胴部中位から上位にかけて最大径を計る。口縁部は鋤先形で内外面ともに丁寧なナデを施している。弥生時代中期後半の須玖式の甕棺と思われる。



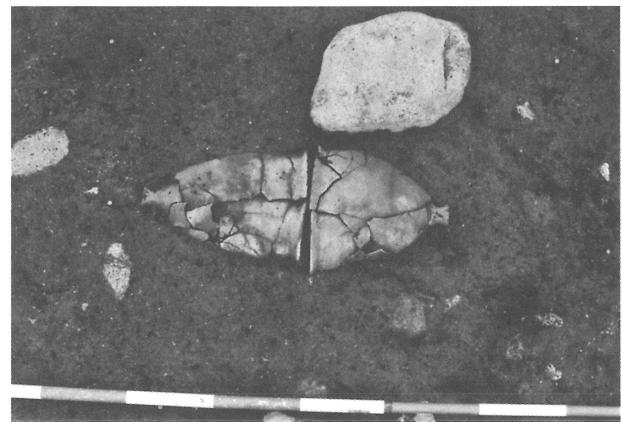
第17図 54区・工事中出土甕棺(1/12)

25 区～31 区

遺跡中央を南北に流れる旧河川跡の西側の平野部にあたり、小児用の甕棺墓が密集して検出されている。前述した丘陵先端部の甕棺墓群からは北西側に約 350m 離れている。調査では弥生時代中期～後期前半の小児用甕棺が検出されている。30 区～31 区では、比較的密集した状態で出土しているが、その大部分は後世の削平などによって遺構上面が削られており、甕棺も完形のものは少なく半分しか残存していないものが多い。また、30～31 区より西側に約 60m 離れた調査区(25 区)では脚台付甕の合わせ口甕棺が 1 基検出されている。



30 区甕棺検出状況



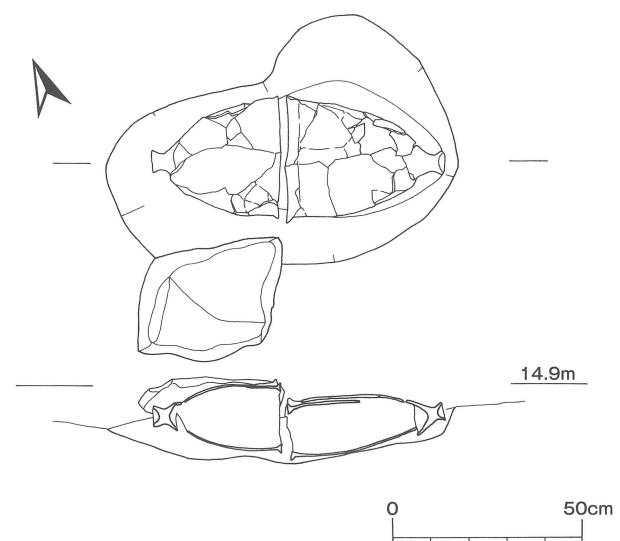
25 区 1 カメ

25 区 1 カメ

遺跡の最も北西側にあたる調査区では、河川堆積層と考えられる礫層の直下から、脚台付甕の合わせ口甕棺が 1 基検出された。その大きさから小児用と思われる。甕棺はほぼ水平に近い状態で埋葬されており、すぐ横には平らな石が検出された。この甕棺に伴う標石のようである。検出された墓坑の平面形状は不定形である。長軸 93cm、短軸 65cm で遺構の掘り込みは約 15cm と非常に浅い。墓坑検出面よりも甕棺検出面の方が高く、後世の削平によって大部分が削られていることから、墓坑の正確な規模は不明である。甕棺が埋納された当時は、墓坑は深く掘り込まれておりその上に標石が置かれていたと想定される。また、胎土は白っぽく、表面にはススとコゲが付着していることから、日用品として使用していたものを甕棺に転用したと考えられる。口縁部下には沈線がめぐり、底部には脚台が付いていることから肥後系の黒髪式土器古段階(弥生時代中期中頃～後半)のものと思われる。おそらく熊本からの搬入品であろう。島原半島では、上甕、下甕の両方とも黒髪式土器古段階の脚台付甕を用いた合わせ口甕棺は現在のところ、佃遺跡のみでしか検出されていない。伊古遺跡(雲仙市瑞穂町)からは上甕に黒髪式土器の脚台付甕を用いた甕棺が検出されている。また、熊本県熊本市の神水遺跡(吉田 2004)では黒髪式土器の脚台付甕を用いた合わせ口甕棺が出土しており、その形状などは佃遺跡のものと類似している。

【参考文献】

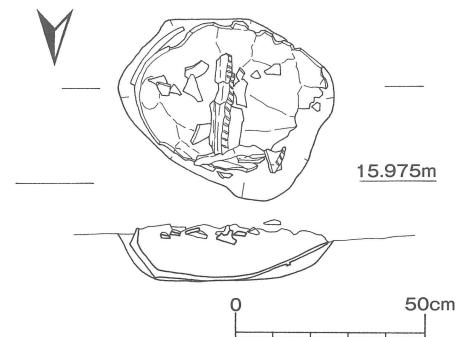
吉田麻子 2004 『神水遺跡VI』 都市計画道路船場・神 水線建設に伴う埋蔵文化財報告書 5 熊本市教育委員会



第 18 図 25 区 1 カメ検出状況(1/20)

30 区 2 カメ

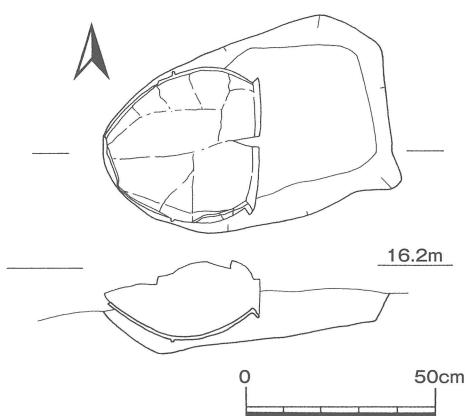
30 区からは小児用甕棺が密集して検出された。その中でも 30 区 2 カメは比較的残存状態が良好であったため報告する。墓坑の平面形状は楕円形である。長軸 57cm、短軸 48cm、深さ約 13cm で、埋置角度は 35° であり、埋葬の際には西方向から甕棺を挿入したようである。弥生時代後期の単甕で、その大きさから小児用と思われる。墓坑検出面が甕棺検出面とほぼ同じ高さで、甕棺も側面の半分は後世の削平により壊されていることから、墓坑の正確な規模などは不明である。



第 19 図 30 区 2 カメ検出状況(1/20)

31 区 1 カメ

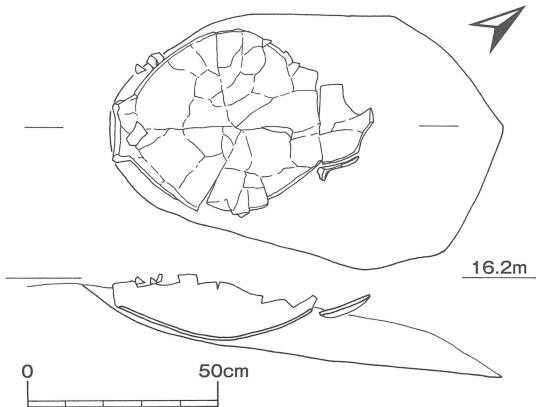
31 区からは 3 基の甕棺が検出された。その中でも残存状態が良い 31 区 1 カメと 3 カメを報告する。31 区 1 カメは小児用の単甕である。墓坑の平面形状は楕円形である。長軸 80cm、短軸 58cm、深さ約 17cm で、甕棺は墓坑に対してほぼ水平に埋置されており、埋葬の際には東方向から甕棺を挿入したようである。弥生時代後期前半の肥後系の甕棺で、搬入品と考えられる。また、墓坑検出面よりも甕棺検出面の方が高く、甕棺も半分ほどが残存していない状況であったため、後世の削平により遺構の 1/2 は壊されているものと想定され、墓坑の正確な規模などは不明である。



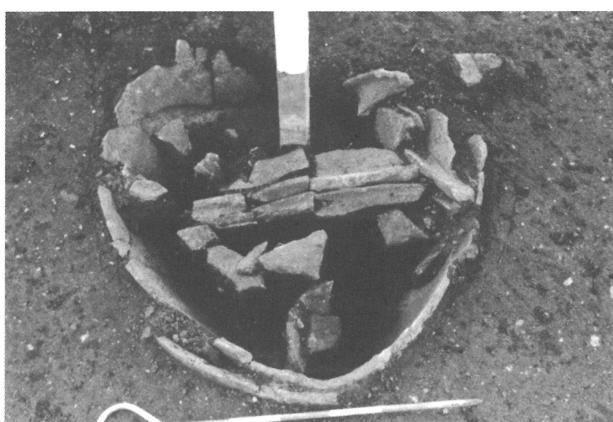
第 20 図 31 区 1 カメ検出状況(1/20)

31 区 3 カメ

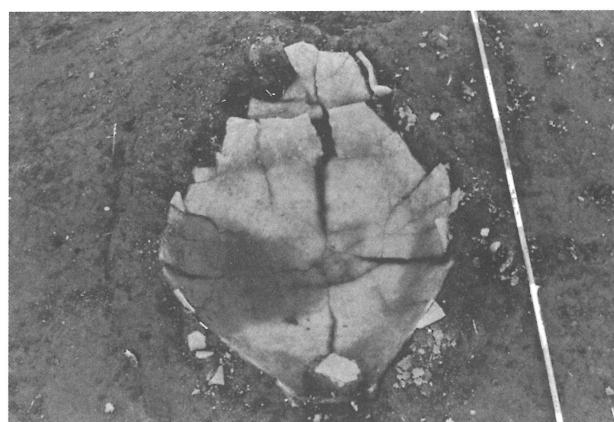
31 区 1 カメより北西に約 3m 離れた地点から検出された。小児用の合わせ口甕棺である。墓坑の平面形状は楕円形で、長軸 103cm、短軸 68cm、深さ約 25cm で、甕棺は墓坑に対してほぼ水平に埋置されている。上甕、下甕どちらも佐賀平野周辺からの搬入品と考えられ、時期は弥生時代中期後半～後期前半と思われる。また、墓坑検出面よりも甕棺検出面が若干高く、甕棺も半分ほどが残存していない。埋葬の際には北東から甕棺を挿入されたようである。



第 21 図 31 区 3 カメ検出状況(1/20)



30 区 2 カメ



31 区 3 カメ

—25 区～31 区出土甕棺—

25 区 1 カメ

33は小児用合わせ口甕棺の上甕である。脚台付甕で胴部が張りぎみで寸胴。口縁部直下でやや内湾する。逆三角形の口縁部は内部にも大きく張り出す。胴部及び脚台部は内外面とも縦位のハケ、内面はナデ消し。又、口縁部付近は丁寧な横位のナデ、口縁部外面には幅1.5mmほどの沈線をめぐらせる。底部及び脚台部に丹塗りを施されたような痕跡があり、外面胴部にはコゲの付着がみられることから、調理用の土器として使用した後に甕棺に転用されたものと思われる。土器の胎土は白っぽく、その形状などから、肥後系の土器と思われる。

34は小児用合わせ口甕棺の下甕である。ほぼ同様の33（上甕）と合わせ、東西方向を軸としてほぼ水平に検出された。脚台付甕で胴部はあまり張らず、ゆるやかに立ち上がる。胴部上半では若干内湾し、口縁部は逆三角形状を呈する。口縁部下4cm付近に幅1.5mmほどの沈線を施す。半周ごとに分けて全周をめぐるが、そのつなぎ目は上下にややすれる。胴部下半から底部・脚台部の外面は目の細かいハケ。胴部上半から中央部は長いストロークのハケ。内面はハケ後にナデ。口縁部付近は丁寧な横位のナデ。外面胴部から底部にかけてコゲの付着がみられることから、調理用の土器として使用した後に甕棺に転用されたものと思われる。また、土器の胎土は白っぽく、その形状などから黒髪式土器の古段階のもので弥生時代中期中頃のものと思われる。

30 区 2 カメ

35は単体の甕棺である。底部は平底で胴部中位にかけてやや内湾しながら立ち上がり、胴部中位に最大径を測り、胴部中位から胴部上位までやや直線的に立ち上がる。口縁部は欠損しており、その形状は不明である。胴部中位には三角突帯がめぐり、その下に台形突帯がめぐる。台形突帯には刻目が施されており、突帯が異様に張り出しているのが特徴である。外面は突帯から胴部上位にかけて縦位のはけ、突帯から底部にかけては斜位のハケ、内面は胴部上位に指頭圧痕がみられ、胴部上位から底部にかけて斜位のハケを施している。弥生時代後期の甕棺である。

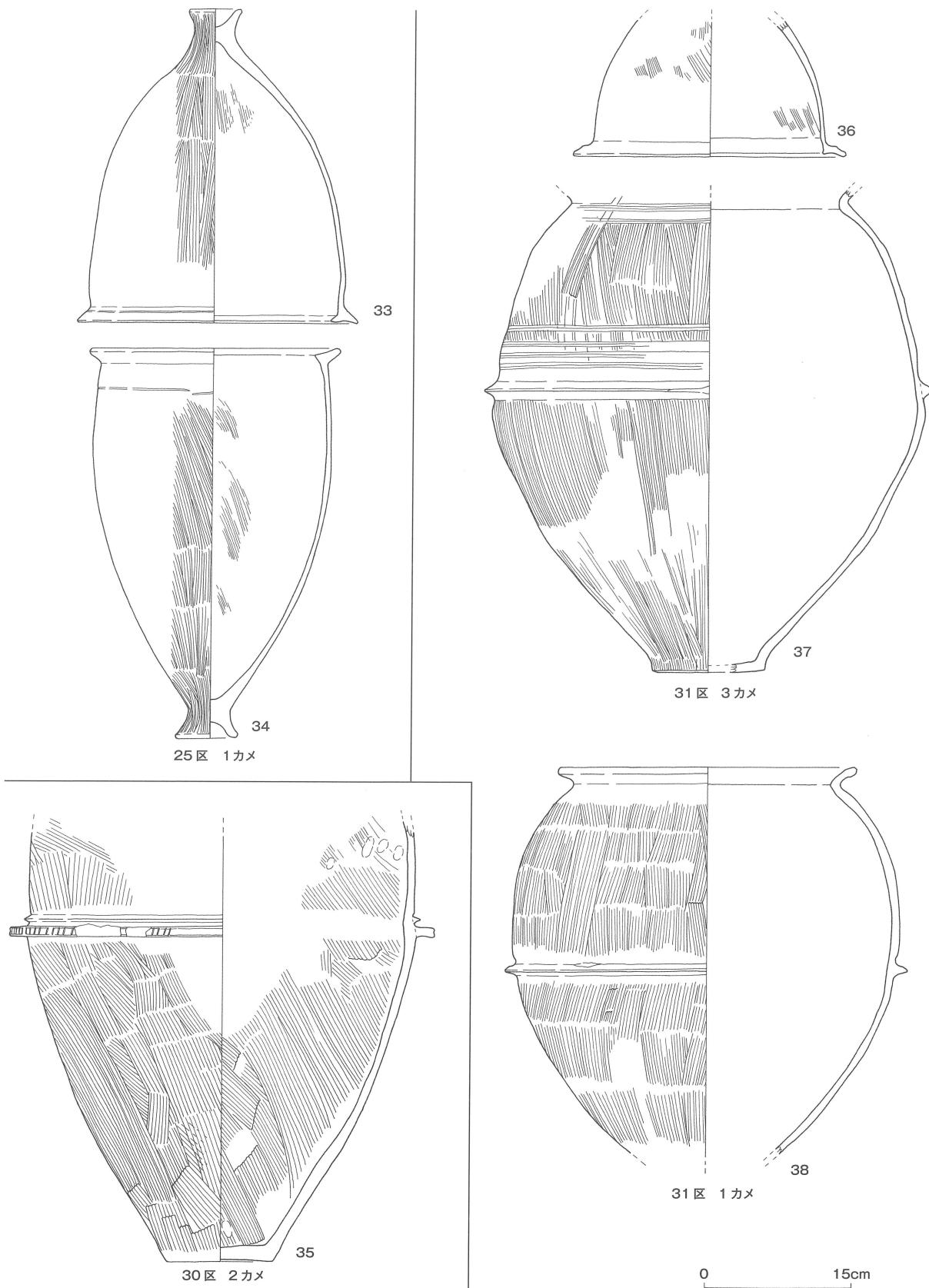
31 区 3 カメ

36は鉢で37の上甕である。底部は欠損しているが、おそらく平底と思われる。胴部中位から口縁部下にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部は鋤先形をなす。口縁部は内外面ともにナデ、内面胴部は斜位のハケ後にナデ。外面胴部中位は斜位のハケ、胴部上位はナデを施している。北部九州系の弥生時代中期後半のものと思われる。

37は下甕である。平底で胴部下位から胴部上位にかけて内湾しながら立ち上がる。胴部中位には1条の三角突帯が貼り付けられており、胴部形状は卵型に似ている。頸部のくびれはやや甘く、口縁部は欠損しているが、頸部の形状から外反しながら立ち上がると思われる。口縁部及び胴部内面はナデ、外面胴部上位は横位のナデと斜位のハケ、胴部中位は横位のハケとナデ、胴部下位は斜位のハケとナデを施している。弥生時代後期前半の甕棺である。

31 区 1 カメ

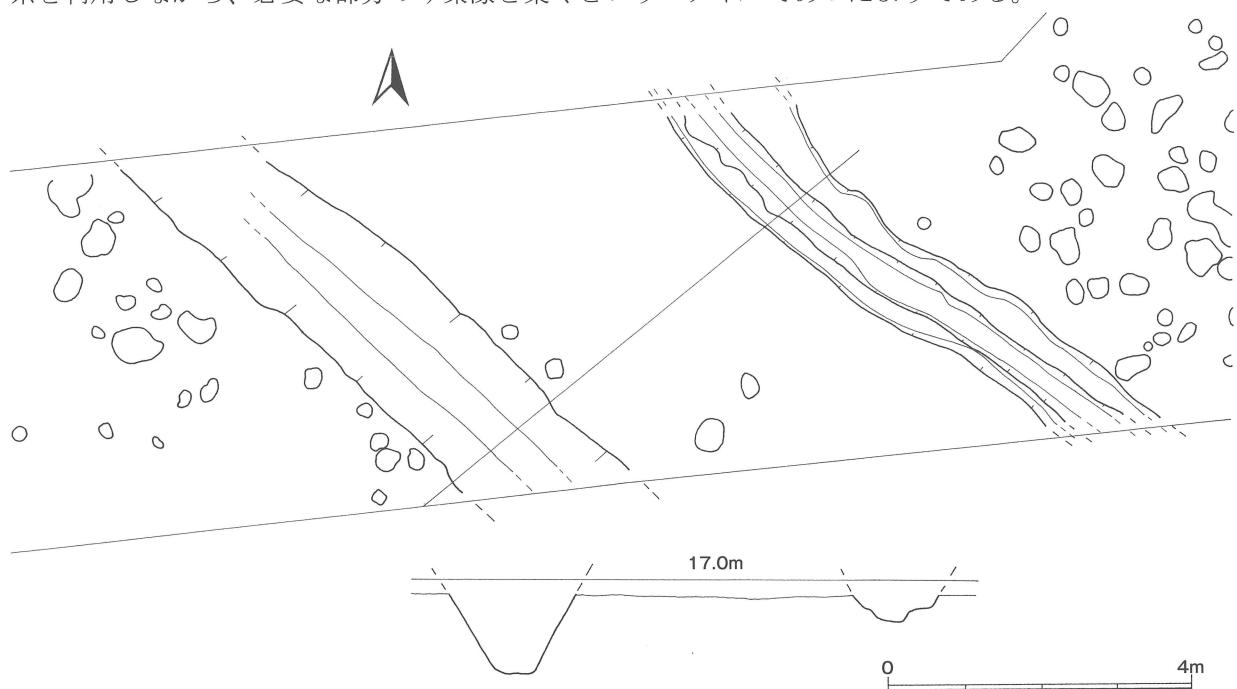
31は単体の甕棺である。全体的に丸みをおびており、胴部最大径には三角突帯が1条貼り付き、胴部下位から頸部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。外面口縁部はナデ、胴部は斜位のハケ、突帯部はナデで、内面はナデを施されている。肥後系の弥生時代後期前半の甕棺である。



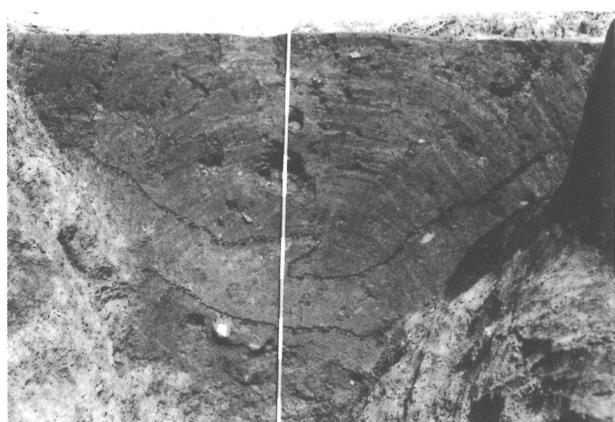
第22図 25~31区 出土壺棺 (1/6)

第3節 環濠

87区SB-1から東側に約20m離れた地点では溝状遺構が検出された。遺構の形状などから環濠と思われる。4mほどの間隔をおいて2条検出されており、一方は幅1.5m、深さ1mの断面「V字型」で、もう一方は幅1m、深さ40cmの2段掘りで、「V字型」の溝に並行するように検出された。溝状遺構周辺には弥生時代から古墳時代の遺構が多く検出されているが、2本の溝状遺構の間にはほとんど遺構がみられない。このことから、その間には溝状遺構掘削時の廃土を利用した土壙などがあったと思われる。また、環濠内の土層の堆積状況は2条とも類似しており、環濠内からは、弥生時代中期後半～弥生時代後期後半の遺物が出土している。これらのことから、前述した竪穴住居跡群とほぼ同時期に存在していたようである。また、2段掘りの溝については東側に40mほど離れた調査区で検出されており、V字型の溝も同様に続くものと想定される。他の調査区からは環濠と思われる溝状の遺構は検出されなかつた。また、環濠が検出された東側には倉地川が、西側には調査で検出された旧河川跡があり、今回検出された環濠はこの2つの河川に繋がるようである。今回の調査で検出された環濠は佃遺跡の中で最大の規模を誇る竪穴住居跡(87区SB-1)の北側を通り旧河川跡に繋がると思われる。これらのことから、佃遺跡の集落構造は、集落全体を環濠で囲むのではなく、丘陵や河川などの自然地系を利用しながら、必要な部分のみ環濠を築くというスタイルであったようである。



第23図 環濠(1/100)



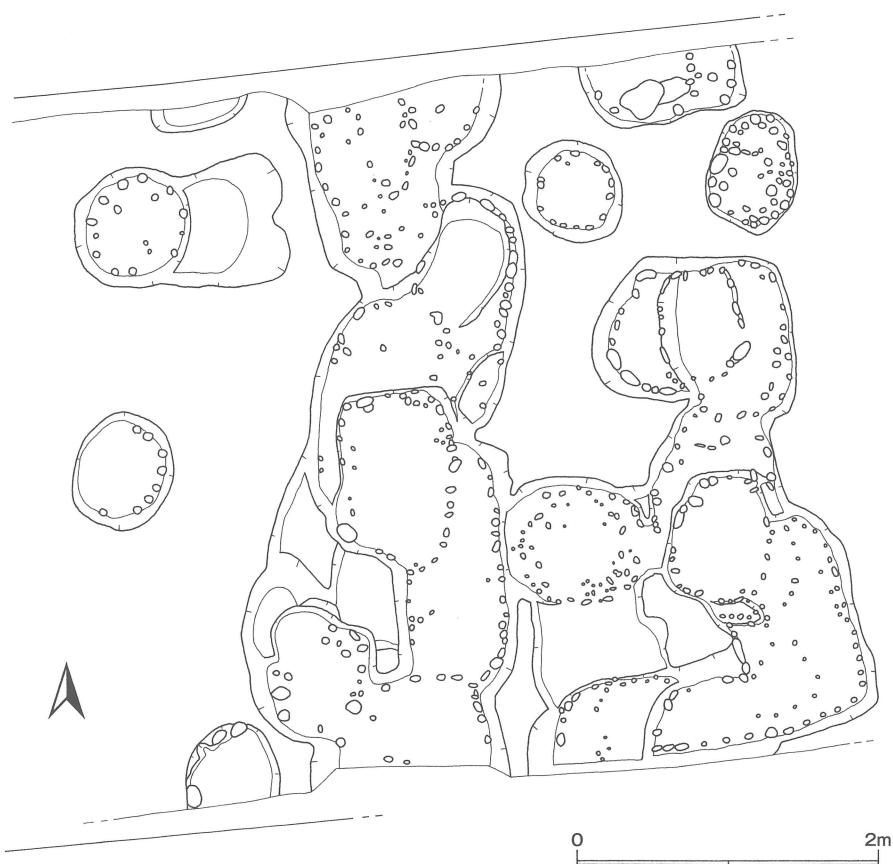
環濠土層堆積状況



環濠完掘状況

第4節 ウッドサークル

遺跡の中央からは南北に縦断する旧河川跡が検出され、旧河川跡内からはウッドサークルが検出された。主に8区及び34区から検出され、調査では100基ほどが確認されている。8区から34区までは150mほど離れており、8区が上流、34区が下流にあたる。このことから、8区から34区までの範囲内に同様の遺構が続くものとすれば、その数は数百基単位に及ぶものと予想される。遺構の平面形状は、円形、楕円形、隅丸方形、不定形など様々で、土坑の深さも、深さ1mのものや、立ち上がりがないものも存在する。立ち上がり部直下には径1cm～5cmほどの杭痕が一重及び二重に巡っており、立ち上がり壁面部分にも杭痕が確認できることから、比較的細い木の杭が上部にまで伸びていたことが想定される。ウッドサークル内からは弥生時代中期後半～古墳時代初頭の脚台付甕や高壇などが出土していることから、遺構の時期も出土土器とほぼ同時期のものと思われる。残念ながら木製品は出土していない。佃遺跡周辺では有機質の遺物はほとんど残存しないが、調査では遺構底面に薄く黒色粘質土が検出されたものもあり、木製品が存在していた可能性も高い。また、同様の遺構は雲仙市伊古遺跡や福岡県北九州市長野小西田遺跡でも検出

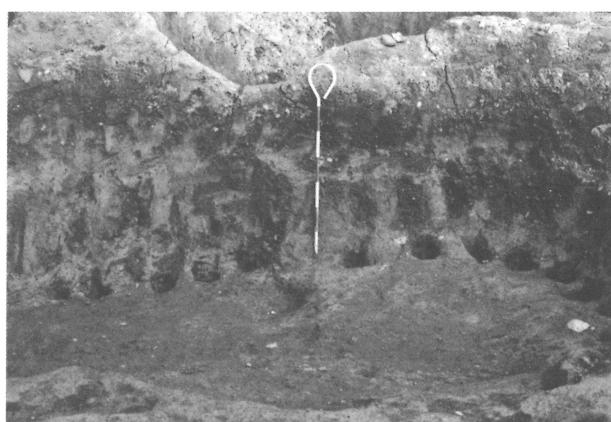


第24図 ウッドサークル(1/50)

されている。長野小西田遺跡からは遺構内から木製品の未製品が検出されており、「木製品水漬遺構」として報告されているが、全ての遺構が木製品の水漬遺構と考えられてはおらず、佃遺跡、伊古遺跡の調査成果と併せて今後の検討が必要であろう。



8区ウッドサークル検出状況



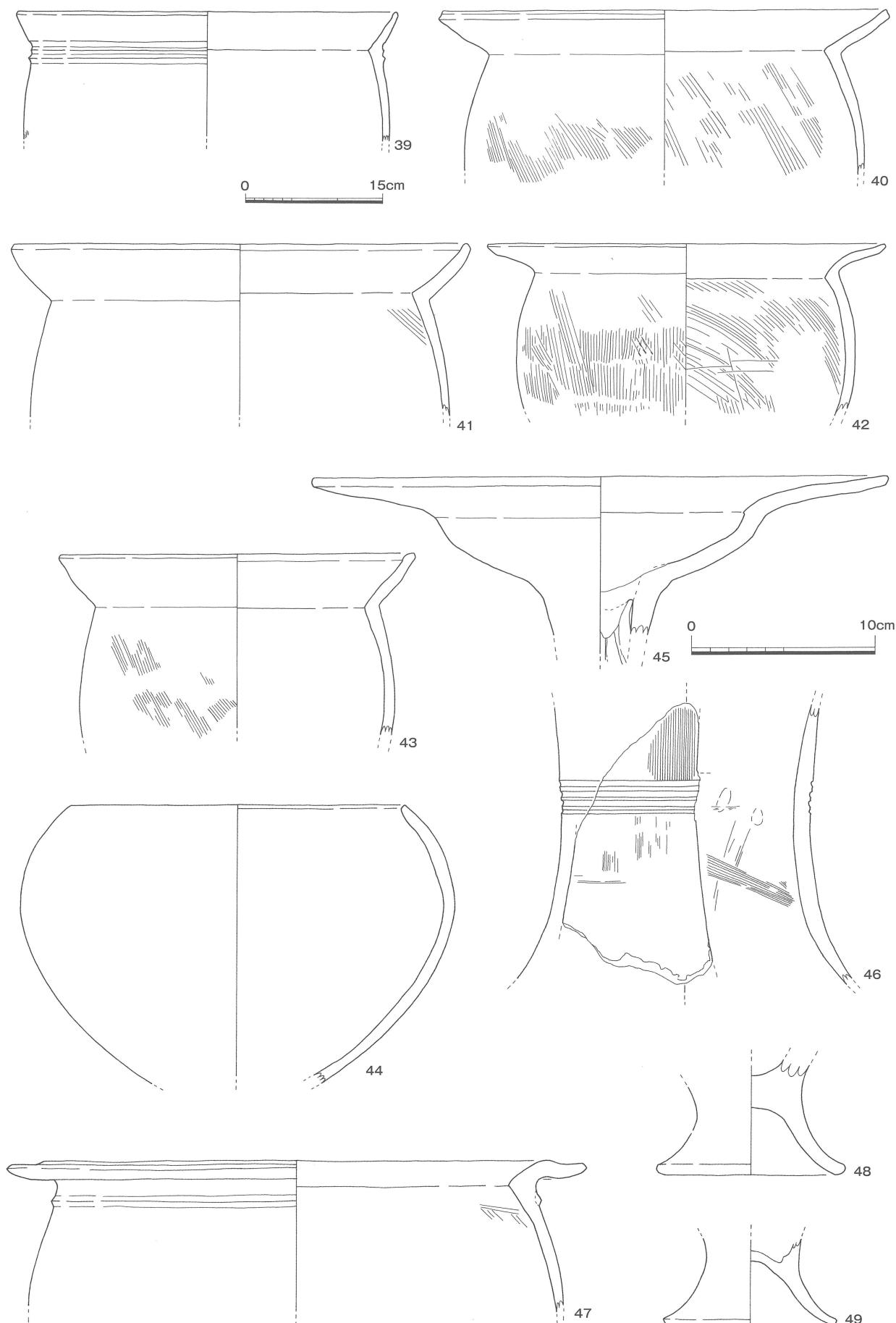
8区ウッドサークル杭痕

—34 区ウッドサークル出土土器—

39 は甕棺の胴部上位～口縁部にかけての資料である。頸部には2条の三角突帯がめぐり、頸部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。外面胴部は斜位のハケ、頸部から口縁部にかけてはナデが、内面はナデが施されている。弥生時代後期の甕棺である。40 は脚台付甕である。口縁部から胴部上位にかけて残存している。胴部上位から頸部まではゆるやかに内湾しながら立ち上がり、頸部はくびれ、頸部から口縁部までは外反する。口縁部は内外面ともにナデ、胴部外面は縦位及び斜位のハケ後にナデ、胴部内面は斜位のハケを施している。胴部外面には煮炊きの際に付着したと思われる焦げがみられる。41 は脚台付甕である。胴部から底部にかけて欠損している。胴部上位から頸部まではゆるやかに立ち上がり、頸部はくびれて、頸部から口縁部までやや内湾しながら立ち上がる。器壁は口縁部がやや厚く、胴部上位にかけて薄くなる。外面はナデ、内面は口縁部はナデ、頸部下位から胴部にかけて斜位のハケを施している。42 は甕である。口縁部から胴部中位にかけて残存。胴部中位から頸部までゆるやかに内湾しながら立ち上がり、頸部はくびれ、頸部から口縁部にかけて外反する。底部は欠損しており形状は不明。外面胴部上位には煮炊きの際に付着した焦げがみられる。部分的に磨耗が激しい。外面は口縁部から頸部まではナデ、胴部はタタキ後に縦位のハケ。内面は口縁部はナデ、胴部は斜位と縦位のハケを施している。43 は脚台付甕である。胴部上位から口縁部にかけて残存。胴部上位から頸部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がり、頸部から口縁部にかけては外反する。外面は、口縁部はナデ、胴部上位は斜位のハケ後にナデ。内面はナデを施している。44 は底部は欠損しており、全体的な形状は不明だが、無頸壺と思われる。胴部下位から口縁部までゆるやかに内湾しながら立ち上がり、胴部中位に最大径を計る。45 は高坏である。脚柱部から裾部にかけて欠損しており、杯部が残存。口縁部は外側に長く伸びており、坏部下半は浅い鉢状で丸くなっている。口縁部と坏部の屈曲部に突出部分を持っている。口縁部から脚柱部は太く、器壁は坏部下半から脚柱部にかけて厚くなる。内外面ともにナデを施している。46 は肥前型器台の破片資料である。胴部中央には四条の沈線文がみられる。肥前型器台の特徴といえる台形状の透かしがみられ、わりとスリムで小型である。器壁は胴部が厚く、口縁部や底部は薄くなる。外面は沈線文を中心として上下に縦位のハケ後にナデ。内面は裾部上方はナデ、下方は斜位のハケ後にナデ、胴部中位に指頭圧痕を施している。弥生時代後期後半から終末のものと思われる。肥前型器台は雲仙市国見町の龍王遺跡や雲仙市瑞穂町の伊古遺跡、南島原市北有馬町今福遺跡などからも出土している。また、今福遺跡からは弥生時代後期前半の橢円形透かしを持つ器台が出土しており、この器台は肥前型器台の祖型であると考えられている。47 は甕である。胎土は全体的に白っぽく、胴部上位から口縁部にかけて残存する。胴部上位から頸部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がり、頸部下には三角突帯が1条貼り付けられている。外面はナデ、内面は頸部下のみ斜位のハケ、口縁部・胴部上位はナデを施している。48 は脚台付甕の脚台部分である。裾部は外側に開き、器壁は甕と脚台の接着部分が最も厚く、裾部にかけて薄くなる。また、内外面ともに丁寧なナデを施している。内外面ともに煮炊きの際に付着したと思われる焦げがみられる。49 は脚台付甕の脚台部分である。裾部は外側に開く。器壁は甕と脚台の接着部分が最も厚く、裾部にかけて薄くなる。内外面ともに丁寧なナデを施してあり、煮炊きの際に付着したと思われる焦げがみられる。

【参考文献】

町田利幸・宮崎貴夫(1986)『今福遺跡III』長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会



第25図 34区 ウッドサークル出土土器 (1/3)・甕棺 (1/6)

第5節 佃遺跡出土石包丁

佃遺跡からは多くの石包丁及び未成品と考えられる石器が検出されている。第26図には27点の石包丁と6点の未成品と考えられる資料を掲載しているが、このほかに未成品や素材と考えられるものが数点確認される。現段階では出土遺物すべてを精査できておらずこのほかにも存在する可能性が高い。島原半島及びその近隣の遺跡においても石包丁の検出が確認されているが、数点～10点ほどの場合が多い。もちろん、調査面積の大小にもよると考えられるが佃遺跡のそれは突出している。

1～22は刃部が片刃のもので、23以降は両刃である。また、1～15は地元産出の角閃石安山岩や安山岩系の石材を素材とするもので、やや硬質の石材を素材としており、16以降は堆積岩系または砂岩系の石材を使用したものである。刃部が片刃のものが大半を占めており、特に在地の石材のものはすべて片刃となっている。穿孔方法は両側からの回転によるものであるが、8のみ穿孔部分が歪んでおり、穿孔後に加工を行った可能性がある。いずれも石製の穿孔具と想定される。今回は、刃部形状や地元産以外の石材の産地や材質についてまったく検討できていないが、16以降の堆積岩系及び砂岩系と考えられる石材のほとんどは遺跡近隣では獲得できないと考えられ、遠隔地からの交易によるものと考えられる。また、素材や未成品と考えられるものには、地元産以外の石材もみられ、原石や加工された未成品段階で獲得していることが予想される。

第1表 佃遺跡出土石包丁計測表

※長さ・幅・厚さ(cm)

番号	区	遺構	層位	石材	穿孔方法	刃部	備考	長さ	幅	厚さ	重さ(g)
1	84		III	角閃石安山岩	両側穿孔	片刃	完形品・刃部に光沢有り	4.40	8.70	0.80	38.3
2	34		V	角閃石安山岩	両側穿孔	片刃	右側未穿孔	4.65	9.40	0.80	55.2
3	25			角閃石安山岩	両側穿孔	片刃	穿孔部の間隔が広い	4.10	7.55	0.75	33.8
4	34		V	角閃石安山岩	両側穿孔	片刃	刃部に光沢有り	4.90	5.50	0.75	32.4
5	7		IIIc	安山岩系石材	両側穿孔	片刃		4.85	5.95	0.80	32.3
6	34		V	安山岩系石材	両側穿孔	片刃		4.60	7.25	0.60	35.3
7	34		V	角閃石安山岩	両側穿孔	片刃	背面側右側縁に光沢有り	3.90	6.15	0.50	21.2
8	90		III	角閃石安山岩	両側穿孔	片刃	穿孔が真円ではない	5.40	4.95	0.90	31.3
9	7		V	安山岩系石材	両側穿孔	片刃	刃部に光沢有り	4.50	7.10	0.75	32.8
10	8		V	安山岩系石材	両側穿孔	片刃	刃部に光沢有り・上辺の反り	4.20	8.90	0.75	44.0
11	33		III	角閃石安山岩	両側穿孔	片刃	刃部に光沢有り	5.10	4.15	0.70	22.6
12	32	SK-1		安山岩系石材	両側穿孔	片刃		3.55	8.40	0.85	36.6
13	83		II	角閃石安山岩	両側穿孔	片刃		4.55	6.20	0.70	32.3
14	34		V	安山岩系石材	両側穿孔	片刃		3.05	4.80	0.55	14.3
15	83		II	安山岩系石材	不明	片刃		4.40	4.15	0.80	16.3
16	11		V	堆積岩系石材	両側穿孔	片刃	完形・刃部摩滅及び光沢有り	3.75	11.80	0.65	45.6
17	87	SB-1-C		堆積岩系石材	両側穿孔	片刃	穿孔が上辺よりではなく中央	3.90	9.35	0.70	32.3
18	34		V	堆積岩系石材	不明	片刃		3.65	4.35	0.55	13.2
19	90		III	砂岩質石材	両側穿孔	片刃		4.35	4.15	0.70	16.1
20	34		V	堆積岩系石材	両側穿孔	片刃	刃部に光沢有り	3.50	5.30	0.60	15.6
21	84	4号集石		堆積岩系石材	両側穿孔	片刃	刃部に光沢有り	5.40	5.50	0.60	24.9
22	35		V	堆積岩系石材	両側穿孔	片刃		4.05	3.60	0.45	8.6
23	34		V	砂岩質石材	両側穿孔	両刃		3.50	6.60	0.70	27.4
24	87	SB-1-C		堆積岩系石材	両側穿孔	両刃	25と同じ石材	3.80	6.15	0.45	19.1
25	86(2)	SB-1		堆積岩系石材	両側穿孔	両刃	24と同じ石材	3.90	5.35	0.60	13.5
26	84			堆積岩系石材	両側穿孔	両刃		3.55	4.00	0.65	10.7
27	14		V	堆積岩系石材	両側穿孔	両刃	破損後折れ面に研磨痕有り	3.40	5.15	0.60	11.1
28	90		III	角閃石安山岩			未成品・板状素材	5.70	12.00	1.70	179.1
29	86(2)		III	角閃石安山岩			未成品	4.20	11.50	1.70	101.0
30	87		III	砂岩質石材			未成品	7.65	4.80	1.10	52.4
31	86(2)	SB-1		角閃石安山岩			未成品・片刃に加工?	5.20	6.70	1.40	69.0
32	84	SD-1		角閃石安山岩			未成品・板状素材	5.35	4.25	1.00	29.7
33	87		III	角閃石安山岩	両側穿孔		未成品・板状素材	4.65	5.40	0.95	27.5



第26図 石包丁及び未製品 (1/3)

第3章　まとめ

第1節　総括

—佃遺跡の位置付けについて—

佃遺跡は旧石器時代から近世までの複合遺跡である。遺跡の西側には神代川、東側には倉地川が流れその間の平野部及び丘陵部全域に遺跡が展開する。遺跡の中心的な時期は弥生時代中期後半～古墳時代初頭にあたる。遺跡の中央には南北に横断する旧河川跡が検出されており、8区と34区の旧河川内からは100基を超えるウッドサークルが検出された。同様の遺構は、雲仙市瑞穂町の伊古遺跡や福岡県北九州市の長野小西田遺跡からも検出されており、鍬や鋤などの木製品の貯木場として利用されていたと考えられる。また、77～81区では弥生時代中期後半～古墳時代初頭の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出された。直径8m～10mの平面形状が円形の竪穴住居で、柱穴と壁面立ち上がり部分との間に浅い溝状遺構が検出されている。しかし、後世の削平により、検出された竪穴住居跡の半数が壁面の立ち上がりは10cmにも満たない。また、住居壁面は削平されているため、円形状にめぐる柱穴や住居内の溝状遺構のみ検出されたものも少なくない。77～81区から南側に1.5km離れた地点からは大型竪穴住居跡(87区SB-1)と環濠が検出された。87区SB-1の平面形状は「帆立貝型」に類似しており、長軸約14.5m、短軸約13mの佃遺跡で検出された竪穴住居の中でも最大規模のものである。この住居跡からは小児用の合わせ口甕棺、仿製鏡、祭祀土器などが出土しており、集落の中でも中心的な人物の住居であったと思われる。佃遺跡からは平野部と丘陵部から弥生時代中期後半～後期前半の墓域が検出されている。丘陵部からは佐賀平野付近から持込まれたと思われる弥生時代中期後半の甕棺墓や土坑墓、壺棺墓などが検出された。また、平野部からは肥後系や北部九州系の小児甕棺が密集して検出されており、本来の墓域は今回検出された墓域よりも広かったと思われる。

佃遺跡では弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡が倉地川付近の平野部に検出されている。倉地川を挟んで東側には龍王遺跡が広がる。龍王遺跡からは、弥生時代終末～古墳時代初頭の豪族居館と考えられる方形環濠(辻田・小野 2008)から大量の遺物が検出されていることから、その時期には集落の中心的な居住空間は龍王遺跡の方に移っていたと考えられる。

第2節　まとめ

—竪穴住居跡について—

佃遺跡から検出された弥生時代中期後半～後期前半の竪穴住居跡の平面形態は全て円形で、直径は8m～14mほどの比較的大型のものが多い。竪穴住居跡内の床面には張り床と柱穴が検出されており、張り床を剥ぐとその下には浅い柱穴から壁面立ち上がり部分の間に溝状遺構が検出されている。この溝状遺構は幅約80cm～160cm、深さは10cmにも満たない非常に浅い溝で、住居の大きさに伴ってその規模も異なるようである。ほぼ同時期の今福遺跡(町田・宮崎 1986)や十園遺跡(竹中 2005)からも、径10mを超える住居跡が検出されているが、張り床下の溝状遺構は検出されておらず、佃遺跡の竪穴住居の特徴といえる。この溝状遺構の用途は不明であるが、張り床下から検出されている為、排水のような役割を果たしていたとも考えられる。

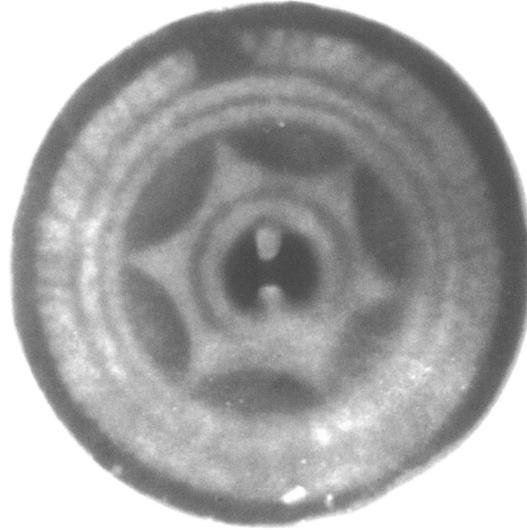
—87区SB-1出土の仿製鏡について—

87区SB-1の床面から弥生時代後期前半の仿製鏡(内行花文鏡)が出土した。鏡の表裏面には織物の纖維と思われる朱色の纖維質のものが付着していることから、本来鏡は朱色の布のようなもので包ま

れていたようである。また、床面直上からは鏡以外にも小児甕棺や丹塗土器などが出土した。小児甕棺の周辺には何かしらの祭祀行為を行った痕跡も確認されており、住居を廃棄する直前に埋められたものと思われる。また、鏡も同様に住居を廃棄する直前に小児甕棺とともに埋納されたものと考えられる。

—佃遺跡出土の甕棺について—

佃遺跡では弥生時代中期後半～後期前半の成人用及び小児用の甕棺が出土している。在地で作られたものではなく全て佐賀平野周辺や熊本から搬入されたものを使用していたようである。佐賀平野周辺から搬入されたと考えられる甕棺は、54 区 1 カメ、工事中出土甕棺、31 区 3 カメなどで、熊本から搬入されたと考えられるものは 25 区 1 カメ、31 区 1 カメなどである。佐賀平野周辺の甕棺搬入ルートは明確ではないが、熊本の甕棺は有明海を渡って搬入されたと考えられることから、独自の集落を展開させながらも各地との交流を行っていた様子が伺える。



87 区 SB-1 出土の小型仿製鏡

—ウッドサークルについて—

遺跡の中央を南北に縦断する旧河川内からは 100 基を超えるウッドサークルが検出された。その遺構内からは弥生時代中期後半～古墳時代初頭の遺物が出土している。同様の遺構は福岡県北九州市長野小西田遺跡(前田・佐藤 2001)や雲仙市伊古遺跡(辻田・小野・大野・村子 2010)でも検出されており、その時期は長野小西田遺跡では弥生時代前期後半～中期後半、伊古遺跡では弥生時代後期～終末期にあたる。木製品に関する遺構は、主に北部九州に多くみられる。佃遺跡、伊古遺跡ともに遺構内から木製品は出土していないが、遺構の形状などから木製品を貯蔵するためのウッドサークルと考えられる。詳細については今後の検討が必要と思われる。

最後に、本報告書を作成するにあたってトレースや写真・図版の編集作業に協力頂いた報告書作成スタッフに感謝申し上げます。

【参考文献】

- 辻田直人・竹中哲郎(2005)『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財報告書(概報)第 5 集 長崎県国見町教育委員会
辻田直人・小野綾夏(2008)『龍王遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書第 3 集 長崎県雲仙市教育委員会
辻田直人(2008)『佃遺跡』雲仙市文化財調査報告書第 4 集 長崎県雲仙市教育委員会
辻田直人・小野綾夏・大野瑞恵・村子晴奈(2010)『伊古遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書第 8 集
長崎県雲仙市教育委員会
前田善人・佐藤浩司(2001)『長野小西田遺跡 2』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 262 集
(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
町田利幸・宮崎貴夫(1986)『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第 84 集 長崎県教育委員会

第2表 出土遺物観察表

図番号	種別	法量(cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考	
1	高壺	口縁部径(復元) 器高 裾部径	19.4 14.9 10.1	外面 口縁部: 橫位ナデ 脊部: 縦位ハケ 内面 橫位ナデ 裾部 縦位ナデ	砂粒 角閃石 外面: 橙色 (Hue5YR7/6) 内面: 浅黄橙色 (Hue10YR8/4)	黒斑
2	台付甕	口縁部径(復元) 残存高	15.9 15.5	外面 口縁部: 橫位ハケ後ナデ 脊部: ハケ後ナデ 内面 口縁部: ナデ 脊部: 斜位ハケ後ナデ	白色粒子、角閃石、石英 外面: 橙色 (Hue5YR7/6)、 黒褐色 (Hue5YR3/1)、黒色 (Hue10YR1.7/1) 内面: にぶい黄橙色 (Hue10YR7/4)、明赤褐色 (Hue5YR5/8)	
3	台付甕	口縁部径(復元) 残存高	16.0 11.6	外面 口縁部: 橫位ナデ 脊部: 縦位ハケ後ナデ 内面 橫位ナデ	砂粒 外面: 褐色 (Hue7.5YR4/3) 内面: 明赤褐色 (Hue2.5YR5/6)	焼成良好
4	台付甕 (脚台部)	残存高 底径(復元)	5.4 10.6	外面 縦位ハケ後ナデ 内面 ナデ	白色粒子、角閃石、石英 内外面: 浅黄橙色 (Hue10YR8/3)、灰白色 (Hue2.5Y7/1)	
5	台付甕	口縁部径(復元) 残存高	20.8 7.4	外面 ナデ 内面 ナデ	角閃石、石英、白色粒子 外面: にぶい橙色 (Hue10YR7/2)、褐灰色 (Hue10YR4/1) 内面: 橙色 (Hue7.5YR7/6)、浅黄橙色 (Hue10YR8/3)	
11	鉢 (ミニチュア)	口縁部径 器高 底径	3.9 3.7 0.3	外面 指頭圧痕、ナデ 内面 指頭圧痕、ナデ	白色粒子、角閃石、赤色粒子 外面: 橙色 (Hue7.5YR7/6)、褐色 (Hue7.5YR4/6) 内面: 橙色 (Hue7.5YR7/6)	丹塗り 手捏ね
7	器台 (ミニチュア)	受部径 器高 裾部径	2.7 3.2 2.9	外面 指頭圧痕、ナデ 内面 指頭圧痕、ナデ 底部 ナデ	白色粒子、角閃石 内外面: 橙色 (Hue7.5YR6/6)、黒色 (Hue7.5YR2/1)	手捏ね
8	鉢 (ミニチュア)	口縁部径 器高 底径	5.0 2.4 1.4	外面 指頭圧痕、ナデ 内面 指頭圧痕、ナデ	白色粒子、角閃石 外面: 灰白色 (Hue10YR7/1)、にぶい橙色 (Hue7.5YR6/4) 内面: にぶい橙色 (Hue7.5YR6/4)	手捏ね
9	脚台 (ミニチュア)	脚台部径 残存高	1.2 2.9	外面 指頭圧痕、ナデ 内面 ナデ	赤色粒子、角閃石 内外面: 灰白色 (Hue2.5Y8/2)	焼成良好 手捏ね
10	台付甕	口縁部径 残存高 胴部最大径	28.5 28.3 27.0	外面 口縁部: 橫位ナデ 脊部: 縦位ハケ後ナデ 内面 口縁部: 橫位ナデ 脊部上位: 太いハケ 中位: 縦位ハケ 下位: 縦位ハケ後ナデ	砂粒、金雲母 外面: にぶい黄橙色 (Hue10YR7/3) 内面: 浅黄橙色 (Hue10YR8/4)	焼成良好 焼成良好
11	甕棺	胴部最大径 (復元) 残存高	42.2 15.2	外面 縦位ハケ後ナデ 突帶部: ナデ 内面 縦位ハケ後ナデ	外面: にぶい黄橙色 (Hue10YR7/4) 内面: にぶい黄橙色 (Hue10YR6/3)、黒褐色 (Hue10YR3/2)	焼成良好
12	甕棺	口縁部径 残存高	15.6 15.0	外面 ハケ後ナデ 内面 ハケ後ナデ、胴部中位: ハケ	角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子 外面: 灰黄色 (Hue2.5Y7/2) 内面: 黑色 (Hue2.5YR2/1) 焼き割れ: 褐灰色 (Hue10YR4/1)	焼成良好
13	甕棺	口縁部径 器高 底径	24.2 47.2 7.8	外面 口縁・突帶部: ナデ 脊部: 縦位ハケ後ナデ 内面 ハケ後ナデ	角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子 外面: 浅黄橙色 (Hue10YR8/4)、灰白色 (Hue10YR8/2) 内面: 褐灰色 (Hue10YR5/1) 内外面: 黑色 (Hue2.5Y2/1)	穿孔
14	甕	口縁部径(復元) 残存高	34.0 6.4	外面 ナデ 内面 ナデ	金雲母、白色粒子、石英 外面: 赤褐色 (Hue2.5YR4/6)、にぶい黄橙色 (Hue10YR7/4) 内面: 浅黄橙色 (Hue7.5YR8/4)	丹塗り
15	甕	口縁部径(復元) 残存高	35.6 5.1	外面 ナデ 内面 橫位ハケ	金雲母、白色粒子、赤色粒子 外面: 明赤褐色 (Hue2.5YR5/6)、浅黄橙色 (Hue10YR8/4) 内面: 明赤褐色 (Hue2.5YR5/6)、橙色 (Hue7.5YR7/6)	丹塗り
16	台付甕	口縁部径(復元) 残存高 胴部最大径	23.6 21.3 21.0	外面 縦位ハケ 内面 口縁部: 橫位ナデ 脊部: 縦位ハケ	砂粒、角閃石、金雲母 外面: にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4) 内面: 黒褐色 (Hue10YR2/2)、赤斑	焼成良好
17	台付甕	口縁部径(復元) 残存高 胴部最大径	22.0 10.3 19.0	外面 口縁部: 橫位ナデ 脊部: 斜位ハケ 内面 口縁部: 橫位ナデ 脊部: 斜位ハケ	砂粒、角閃石、金雲母 外面: にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4)、黒斑 内面: にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4)	
18	甕	口縁部径(復元) 残存高 胴部最大径	25.6 12.8 32.7	外面 ハケ後横位ナデ 突帶部: 横位ナデ 内面 ハケ後横位ナデ	砂粒、角閃石 内外面: 灰白色 (Hue2.5YR8/2)、黒斑	焼成良好
19	広口壺	口縁部径 器高 底径	15.3 17.0 7.0	外面 ヘラミガキ後丹塗り 内面 口縁部: ヘラミガキ後丹塗り 胴部: ナデ	きめ細かい土 外面: 赤色 (Hue10R4/8) 内面: にぶい黄橙色 (Hue10YR7/3)	丹塗り 焼成良好
20	小型台付甕	口縁部径 器高 裾部径	12.7 13.8 7.8	外面 口縁部: 橫位ナデ 脊部: 縦位ハケ後ナデ 裾部: ナデ 内面 口縁部: 橫位ナデ 脊部: 横位ハケ	砂粒、角閃石 外面: にぶい黄橙色 (Hue10YR7/3)、赤斑 内面: 褐灰色 (Hue10YR6/1)、黒斑、にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4)	
21	高壺 (脚台部)	台裾部径 残存高	20.7 17.2	外面 ケズリ 補部: ナデ 内面 ケズリ、ハケ、ナデ	砂粒 外面: 浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)、黒斑 内面: 黄橙色 (Hue7.5YR8/7)	焼成良好
22	高壺	口縁部径(復元) 残存高	30.0 21.5	内外 口縁部: 橫位ナデ 脊部: 縦位ナデ 面 補部: ナデ	砂粒、角閃石 内外面: 橙色 (Hue2.5YR6/8)	
23	袋状口縁壺	残存高 底径	19.1 7.9	外面 横位ケズリ後縦位ヘラミガキ 底部: ケズリ 内面 脊部最大径部: 横位ヘラミガキ 上半: 縦位ハケ後ナデ 下半: 縦位ハケ	石英、砂粒、金雲母 外面: 赤色 (Hue10R5/8) 内面: にぶい橙色 (Hue7.5YR6/4)	丹塗り 焼成良好
24	鉢 (ミニチュア)	残存高 底径(復元)	3.8 1.6	外面 縦位ハケ後ナデ、指頭圧痕 内面 縦位ハケ後ナデ、指頭圧痕	角閃石、白色粒子、石英 内面: 灰黃褐色 (Hue10YR5/2) 外面: にぶい黄橙色 (Hue10YR7/4)、灰黃褐色 (Hue10YR4/2)	手捏ね
25	鉢 (ミニチュア)	口縁部径 器高 底径	5.3 2.9 0.3	外面 指頭圧痕、ナデ 内面 指頭圧痕、ナデ	白色粒子、角閃石、赤色粒子 外面: 橙色 (Hue7.5YR6/6)、褐灰色 (Hue7.5YR4/1) 内面: 橙色 (Hue7.5YR7/6)	手捏ね
26	鉢 (ミニチュア)	残存高 底径	1.9 0.6	外面 指頭圧痕、ナデ 内面 ナデ	石英、白色粒子、赤色粒子、雲母粒子 外面: 橙色 (Hue7.5YR7/6)、褐灰色 (Hue10YR4/1) 内面: 橙色 (Hue7.5YR7/6)	手捏ね
27	甕 (ミニチュア)	口縁部径 残存高	5.0 4.8	外面 指頭圧痕 内面 指頭圧痕	白色粒子、角閃石、赤色粒子 内外面: にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4)	手捏ね
28	甕 (ミニチュア)	残存高 底径	3.6 3.8	外面 指頭圧痕、ナデ 内面 指頭圧痕、ナデ	石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子 外面: 灰白色 (Hue2.5Y7/1) 内面: 灰白色 (Hue2.5Y8/2)	手捏ね
29	甕棺	口縁部径(復元) 残存高	72.4 14.6	外面 ナデ 内面 ナデ	石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子 外面: 橙色 (Hue7.5YR6/6) 内面: にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4)	
30	甕棺	口縁部径 器高 底径	66.8 86.7 9.0	外面 ナデ 内面 ナデ	石英、白色粒子、角閃石、白雲母 内外面: 橙色 (Hue5YR6/6)、浅黄橙色 (Hue10YR8/4) 黒色 (Hue10YR2/1)	焼成良好
31	甕棺	口縁部径 残存高	48.0 53.8	外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子、白雲母、角閃石 内外面: 明赤褐色 (Hue5YR5/6)、淡黄色 (Hue2.5Y8/3)	
32	甕棺	口縁部径(復元) 器高 底径	56.2 95.4 11.0	外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子、石英、赤色粒子、角閃石 外面: 橙色 (Hue7.5YR6/8)、淡黄色 (Hue2.5Y8/4) 内面: 灰白色 (Hue10YR8/2) 内外面: 黑色 (Hue10YR2/1)	焼成良好

図	番号	種別	法量 (cm)	技法的特徴	胎土/色調	備考
22	33	甕棺	口縁部径 器高 底径	28.8 32.2 5.5 外面 口縁部：丁寧な横位ナデ 脊部：縦位ハケ 内面 口縁部：丁寧な横位ナデ 脊部：縦位ハケ後ナデ	砂粒、金雲母、角閃石 内外面：灰白色 (Hue2.5Y8/2)	焼成良好
	34	甕棺	口縁部径 器高 底径	25.6 40.0 5.9 外面 口縁部：丁寧な横位ナデ 脊部：縦位ハケ 内面 口縁部：丁寧な横位ナデ 脊部：ハケ後ナデ	砂粒、金雲母、角閃石 内外面：灰黄色 (Hue2.5Y7/2) 赤斑、黒斑	焼成良好
	35	甕棺	残存高 底径 (復元)	45.0 10.8 外面 斜位ハケ 内面 斜位ハケ、指頭圧痕	白色粒子、石英、角閃石 外面：にぶい黄橙色 (Hue10YR7/4)、褐灰色 (Hue10YR4/1) 内面：にぶい黄橙色 (Hue10YR7/4)	
	36	甕棺	口縁部径 (復元) 残存高	28.0 13.9 外面 口縁部：ナデ 脊部：斜位ハケ 内面 口縁部：ナデ 脊部：斜位ハケ後ナデ	角閃石、石英、赤色粒子、白色粒子 外面：橙色 (Hue5YR6/8)、黒褐色 (Hue7.5YR3/1) 内面：橙色 (Hue7.5YR6/8)	
	37	甕棺	残存高 底径 (復元)	48.8 11.6 外面 脊部上位：横位ハケ、斜位ハケ 中位：横位ハケ、ナデ 下位：斜位ハケ、ナデ 突帶部：ナデ 内面 ナデ	金雲母、白色粒子、石英 外面：赤褐色 (Hue5YR4/8)、黒色 (Hue7.5YR2/1) 内面：赤褐色 (Hue5YR4/8)、浅黄橙色 (Hue10YR8/4) 褐灰色 (Hue5YR5/1)	
	38	甕棺	口縁部径 (復元) 残存高	21.4 39.4 外面 斜位ハケ 突帶部：ナデ 内面 ナデ	金雲母、白色粒子、石英 外面：橙色 (Hue5YR6/6)、黒色 (Hue10YR2/1) 内面：橙色 (Hue5YR6/6)	焼成良好
25	39	甕棺	口縁部径 (復元) 残存高	41.2 14.2 外面 ナデ、斜位ハケ 内面 ナデ	角閃石、石英、赤色粒子、白色粒子 外面：にぶい黄橙色 (Hue10YR7/4)、黒色 (Hue10YR2/1) 内面：にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4)	焼成良好
	40	台付甕	口縁部径 (復元) 残存高	24.2 9.0 外面 口縁部：ナデ 内面 脊部上位：縦位ハケ後ナデ 下位：斜位ハケ	白色粒子、石英、角閃石、金雲母 外面：暗褐色 (Hue10YR3/3)、黒色 (Hue10YR2/1) 内面：灰黄色 (Hue2.5Y7/2)、黒色 (Hue10YR1.7/1)	焼成良好
	41	台付甕	口縁部径 (復元) 残存高	24.6 9.4 外面 ナデ 内面 口縁部：ナデ 内面 脊部上位：斜位ハケ 下位：ナデ	角閃石、石英、白色粒子 内面：明褐色 (Hue7.5YR5/6) にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4)	
	42	甕	口縁部径 (復元) 残存高	21.7 9.9 外面 口縁部：ナデ 脊部：タタキ後縦位ハケ 内面 口縁部：ナデ 脊部：斜位ハケ	角閃石、白色粒子、石英 外面：浅黄橙色 (Hue10YR8/4)、褐灰色 (Hue10YR4/1) 内面：明赤褐色 (Hue5YR5/8)、褐灰色 (Hue5YR5/1)	
	43	台付甕	口縁部径 (復元) 残存高	19.3 10.0 外面 口縁部：ナデ 脊部：斜位ハケ後ナデ 内面 ナデ	角閃石、石英、白色粒子 内面：浅黄橙色 (Hue10YR8/3)、褐灰色 (Hue10YR4/1) 外面：黑褐色 (Hue10YR2/2)	
	44	無頸壺	口縁部径 (復元) 残存高	18.2 15.2 外面 ハケ後ナデ 内面 ハケ後ナデ	角閃石、石英、白色粒子、雲母粒子 外面：浅黄橙色 (Hue10YR8/4)、にぶい褐色 (Hue7.5YR5/4) 内面：浅黄橙色 (Hue10YR8/4)	
	45	高坏	口縁部径 (復元) 残存高	31.4 8.6 外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子、赤色粒子、石英、角閃石 外面：浅黄橙色 (Hue10YR8/3)、明赤褐色 (Hue5YR5/6) 内面：明黄褐色 (Hue10YR6/6)、黒褐色 (Hue10YR3/1)	
	46	器台	残存高	15.3 外面 縦位ハケ後ナデ 内面 上位：ナデ 下位：斜位ハケ後ナデ	角閃石、白色粒子、白雲母 外面：橙色 (Hue7.5YR6/8)、にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4) 内面：にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4)	
	47	甕	口縁部径 (復元) 残存高	31.4 8.4 外面 ナデ 内面 口縁部：ナデ 脊部：斜位ハケ、ナデ	赤色粒子、石英、角閃石、雲母粒子 内面：淡黄色 (Hue2.5Y8/3)	
	48	台付甕 (脚台部)	残存高 底径 (復元)	6.3 10.3 外面 ナデ 内面 ナデ	白色粒子、角閃石、石英 内面：淡黄色 (Hue2.5Y8/3)、にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3)	焼成良好
	49	台付甕 (脚台部)	残存高 底径	4.7 9.4 外面 ナデ 内面 ナデ	角閃石、白色粒子 内面：灰黄色 (Hue2.5Y7/2)、暗褐色 (Hue10YR3/4)	焼成良好

